

海外における中国伝統音楽南音の伝承と変容についての研究

——マレーシアを中心に——

長崎大学多文化社会学部 教授 王維

1. はじめに

南音は中国福建省泉州を発祥地とする「中国音楽史の生きた化石」として現存する最古の漢民族音楽であり、2009年にユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に登録された。南音は漢唐代から明清代までの古代音楽の要素を残しており、閩南¹地域における梨園劇、高甲劇などの劇音楽の基礎となっている。使用する楽器編成は、琵琶、二弦、三弦、洞簫、拍版(歌手が兼任する)などで構成され、歌われる歌詞には閩南語が用いられる。南音は古代の歌舞音楽、詞曲音楽、劇音楽と密接な関係があり、地域の他の民間音楽と融合しながら、発展し今日に至っている。南音は泉州地域をはじめ、台湾、東南アジアなど、閩南出身の華人が居住する地域にも伝わっている。

本稿では、現地調査に基づき、人々の実践と行為、および生きるための工夫としての南音は海外華人社会でどのように伝承されてきたのか、南音によるつながりや関係性は人々の社会的参与、南音の継承にどんな役割を果たしてきたのかについて、おもにマレーシア南音の伝承組織を通して考察していく。

2 南音の音楽的理諳および先行研究

2-1 南音の性質

音楽人類学、民族音楽学の分野では、しばしば「関係論的音楽論」、およびそれを「関係論的思考の限界」として見直しながら、批判的に継承する「ポスト関係論」の視点から音楽研究が取り上げられている(野澤ら 2021; 相田ら 2022; 毛利ら 2018)。「関係論的思考」とは、人類学の基礎的立場の一つである、さまざまな形でつながりをもとうとする人々のつながり、たとえば親族関係、同業者関係、政治的連帯などを重視するといった概念に対して過剰に肯定的な意味をもたせてきたことを指す。このような「関係論的思考」によって、人類学が人々の実践の特定の局面を見落としてしまう可能性」があり、この概念に限界があると指摘された(相田 2022: 407)。「ポスト関係論」とは、関係論的思考の限界を乗り越え、「一見、関係論的には見えないところからスタートして、ラディカルにあるいは

¹閩南とは福建の南地域の略称である。

は、逆しまな出発点からつながりや関係論的思考論を相対化し、それらについて考察を深めていこうとするものである。音楽研究においてこれらの方針は、「一方では関係論的音楽論の相対化を図りつつも、もう一方では関係論的音楽論が積み上げてきた理論的な成果の一部をより徹底してラディカルに延長することを目指している」（相田 2022 : 414）。関係論的音楽論において、これまで二つの重要な概念、すなわちスモール（2011）による「ミュージックキング」およびトウリノ（2015）の「参与型音楽」がある。いずれもベイトソンの一元論的な世界観の影響を受けながら、音楽を実践と相互行為として捉える方法論的概念である。音楽をすることは行為者としての人々が互いに関わり、社会（コミュニティ）に参加する一つの方法とされる。

音楽研究者のクリストファー・スモールは音楽を作品ではなく、行為としてみなす「ミュージックキング」概念を提唱した。人びとの行為によって生成されるものとして音楽を捉え直そうとしている（スモール 2011）。音楽する（ミュージックキング）ことを、音楽家が曲を弾くことから音楽ホールの掃除まで非常に幅広く捉えている。スモールが音楽を名詞ではなく、動詞として取られるようになったのは、本人もその著作の中で触れたように、文化人類学者のグレゴリー・ベイトソンが目指した部分部分ではなく、全体論的な認識論の思考方法の影響である（スモール 2011 : 108）。ベイトソンは物事を平面的に捉えるのではなく、関係的に、すなわち「コンテクスト」に眼を向けて多元的に、多層的に捉えていくことの必要性を提起している。例えば、葉と茎と芽の形態関係は名詞か動詞を用いることによって「コンテクスト」か「コンテンツ」の問題になる。「“葉”は『緑色した平たいやつ』としてではなく、（そこから葉が生じてくるところの）茎と（葉と茎とがなす角度に生じてくる）芽（二次的な茎）との間に、ある特定の関係を結ぶもの」、「文構造において『動詞』その他の部分とある特定の関係者を結ぶ一クラスの語群のメンバー、として見ている」。ベイトソンはこのような植物の構造と文の構造を「形式とパターン」として捉え、「内容よりも形式に一定のコンテクストの『なか』で生じる個々の事柄よりもコンテクストそのものに、関係付けられた人間ないし現象よりも関係そのものに、焦点を結んでいる」と主張する（ベイトソン 2023 : 328-332）。スモールのミュージックキングという捉え方は音楽のコンテクスト構造に注目して研究を目指そうと考えられる。

すなわち、「音楽は作品ではなく」実践、行為である。その行為意味は一連の「関係性」の中にある、という思考方法である。「ミュージックキング」の意味は「あらゆる立場でパフォーマンスに参加している人びと同士の関係の中で見つけられる」「パフォーマンスで実現される関係こそが、ミュージックへの参加者が思い描く理想の関係のモデルとなりメタファーとなる」「それらは人と人との結びつき、個人と社会の結びつき、人間と自然界、さらに超自然的世界との結びつきについてのものである」（スモール 2011 : 38）。彼は二つの主張すなわち「すべてのミュージックキングは真剣な営みで

ある」とこと、「すべての人間には十分なミュージッキング能力が備わっている」が相互に依存し合ひ、ミュージッキングとは演奏することと聞くことであると強調した（スマール 2011：394-398）。

民族音楽学者のトウリノは、音楽には社会的な関係を形成し、維持するための特別な力があると主張する。トウリノはベイトソンの芸術に関する議論、すなわち「芸術とはものごとを統合させる機能を持つ特殊な形式のコミュニケーション」であり、「それが社会的・生態学的な生存に不可欠なのだ」、を援用しながら、音楽がこのような集団形成という役割を通じて、いかにも人間の生命維持活動、社会的な生に関わっていると分析している（トウリノ 2015：19-20）。

トウリノの代表的な概念は「参与型音楽」である。彼にとって、音楽の現場を通じて得られる「一体感」の感覚、「参与」の実践こそが、音楽の中心に位置しているものなのである（トウリノ 2015：316）。トウリノは音楽聴衆と演奏者を二分する作品の上演を前提とした西洋的な「上演型音楽」に対して、アーティストと聴衆という区別がなく、参与者と潜在的な参与者がそれぞれ別の役割を果たすというタイプのターティスティックな実践として「参与型音楽」という概念を提示し、詳細に分析を行っている。「参与型音楽」と「上演型音楽」のどちらも個人を集団に結びつける社会的行為であるが、トウリノは前者の方が「すべての参与者が実際の行為にコミットしていた、それが互いに共有されている」（トウリノ 2015:112）のために、より親密かつ強力に人々を結びづけるだろうと強調する。トウリノによると、参与型音楽における価値観はサウンド自体の質を芸術として探求することよりも、「上手い下手に関わらず参与そのものを応援すること」におかれている。参与型の音楽とは「社会関係から抽象化された芸術を創り出す営みというよりも、パフォーマンスを通じて実現される社会関係に関する何ものかなのだ」（トウリノ 2015：70）。参与型音楽の価値観は「社会関係や参与を促進する」ことにある（トウリノ 2015：310）。

スマールのミュージッキングという考え方には、演奏に先立って存在する西洋的伝統の音楽作品群（楽譜）を前提とする西洋音楽の世界の考え方に対する挑戦との見方がある。トウリノが事例として研究してきた参加型音楽にはリズム感の重視や反復のメロディ、即興演奏などの特徴を持つ歌やダンス、楽器演奏、かつ多くの人が参加する民衆音楽（大衆音楽）のようなものが多い。しかし、本稿の研究対象となっている南音は、上記のような特徴をほとんど持たない少人数が演奏する中国伝統音楽である。なぜ南音を参与型音楽として捉えるのか、その性質はどのようなものなのか、それが参与型音楽、あるいは実践・行為としてどのような特徴があるのだろうか。人々は南音の参加によってどのようなつながりができるのか、またそのつながりは彼らの社会統合にどんな役割を果たしているのか。本稿はこれらの設問を中心に検討してみたい。

2-2 先行研究

南音についての研究は、1980年代以降、歴史学、音楽学、民俗学、とくに民族音楽学の分野において、主に閩南出身の研究者によって行われてきた。その研究の積み重ねによって、現在では、「南音学」という一つの独立した学問分野として成立されている。南音学の研究は、南音の音楽そのものを研究対象とするほか、南音の言語的テクスト、および南音の伝承の三つの側面から行われている²。本稿に関連する南音の伝承についての研究は、南音学研究の中でも重要な位置付けとなっている。研究は大きく理論的考察、現状調査、比較研究の三つの形態に区分されている。民族音楽理論の「場」という概念から見ると、南音楽社は伝承組織であり、南音実践の重要な「場」である。南音楽社に関する研究は現在、組織の構造、伝承方式、「弦友」の関係、儀式活動、演奏形態（曲目、楽器）、演奏者などの方面において行われている³。それ以外、無形文化財として南音文化の再構築の視点から、南音の伝承と伝播の問題を捉える研究がある（鄭 2017）。

海外における南音の伝承については、大陸の学者によるいくつかの研究が見られる（羅 2007、龔 2010、王州 2016、陳敏紅 2018、黃志偉 2018、鄭 2019、陳燕婷 2020、臧 2020、王維 2021など）。本稿に関連するマレーシアの南音について、黃志偉の「論福建南音在馬來西亞的傳承與發展」（2018）では、かつてマレーシアにおける南音の伝承に影響を与えたマラッカの同安金匱南音楽社を取り上げ、その盛衰について紹介している。それに対して、鄭の「中華文化海外“泛家族”式伝承伝播初探」（2019）は、中華文化の伝播というマクロ的視点から、“泛家族”的モデルを用いて、現在マレーシアで唯一日常的に活動しているマレーシア北部のセランゴール州サバッ・ブルナム県福建会館南音楽社の伝承形態について考察している。シンガポールの南音に関しては、主にシンガポール在住の音楽関係者や研究者によって研究してきた。黃秀琴の『新加坡南音初探』（2009）はシンガポールにおける南音の歴史と現状について総合的にまとめており、南音の全体図の把握に参考になる。許による『布衣南渡 中国民間文芸在新加坡的伝播与変遷』（2018）では、南音をシンガポールにおける中国民間芸術の一部として捉え、その内容から南音の文学的意義と価値を検討している。数少ない大陸の音楽研究者臧卓敏の「海外伝統音楽的生存邏輯探蹟 以新加坡南音為対象的考察」（2020）では、中国伝統的「易学」の視点から、シンガポール湘靈音楽社の伝統創造における「変」と「不变」の問題について分析し、湘靈社南音の「以变应变」（変化を持って変化する）「以伝播促伝承」（伝播を持って伝承を推進する）という戦略が、海外の中国伝統音楽の生存を持つ可能性と意義を考察している。

²南音学研究の詳細について王維（2021）を参照

³最新の研究では、陳燕婷の『南音北祭—泉州弦管南音祭的調査与研究』と「南音伝承困境談」、陳孝余と王瓊による「福建南音館閣現状調査報告 上・下」などがある。詳細について王維（2021）を参照。

筆者による前稿（2021b）では、シンガポールにおける南音楽社を取り上げ、華僑華人研究の立場から、文化交流（国内外）、伝統と革新、ハイブリット的なアイデンティティという三つの分析視点を持つて華人伝統文化の伝承について考察した。

海外の南音に関する上記の先行研究を次のように分類ができる。すなわち、音楽学的視点から、①通時的、記述的なもの（羅 2007、黃秀琴 2009、黃志偉 2010）、②中華文化の伝播と生存に関連する事例分析のもの（鄭 2019）（臧 2020）、文学的視点から、③民間芸術の一部として考察したもの（許 2018）、人類学/民族音楽学的視点から、④実態的分析のようなもの（王 2021b）。

本稿はこれまでの研究を踏まえた上、マレーシアにおける南音の伝承を中心に、南音を「参与型音楽」（トゥリノ 2015）「ミュージッキング」（スマール 2011）、南音楽社を「社会的領域」「実践的な場」（ブルデュー 2007）として捉え、南音による主体（華人）と場（南音楽社）の関係性、相互行為に関する分析、海外における南音の伝承形態と課題の提示を試みる。なお、シンガポールにおける南音の伝承について、筆者の前稿（2021b）で検討した。本稿では、行為および参加型としての南音の特徴を分析したあと、比較のためにシンガポールの事例も触れることがあるが、マレーシアの事例を中心には考察していく。

3. 参与型としての南音

3-1 なぜ参与型音楽なのか

「南音」とは、簡単にいえば、中国の南方音楽という意味である。しかし、ここでの南方というのは、広義での南方ではなく、福建省の南地域という狭義の意味での南方を指す。南音は南音以外、弦管、南樂、南管⁴、五音、朗君樂、御前清曲⁵などの呼称もある。「弦管」は一世代上の閩南人が使って

⁴ 「南管」は主に台湾で使用する呼称である。台湾では閩南の出身者が多い。かつて閩南人はよく福建省より北の地域を北方と呼び、北方から伝わり、しかも閩南方言を使用しない劇音楽を「北管」と称していた。しかし、現在「南管」という呼称はあまり中国の閩南地域に用いず、台湾のみ使用することが多い。

⁵ 「御前清曲」についてであるが、各南音社団は盛大な演奏活動を行うとき、必ず「宮籠」（灯籠）や、「御前清曲」に書かれた大きな「涼傘」（傘のような形であるもの）をもつ。その由来は清の時代に遡ることができる。話によると、1713年（康熙52年）康熙帝が60歳の誕生日の際に、全国各地から様々な地方劇や音楽などが北京に送り込まれていた。泉州地域から南音の名手5人を送り、宫廷で南音を演奏した。康熙帝は優雅な南音に惹かれ、5人に「御前清樂」という雅号を与えたと同時に宮籠と涼傘を与えた。5人はそれを持って帰郷したという。従って、「御前清曲」は南音の1つの雅号となったようである。

いた呼称である。「南楽」は中国アモイ、台湾、及び東南アジアの各地によく用いられる呼称である。20世紀初め頃から出版された南音の楽譜にすでに南楽という名称が見られた⁶。そして、1977年より始まった東南アジアの南音大会にも、南楽という名称を使用している。

「五音」という呼称は南音の音階と楽譜の特徴から名づけられたのである。南音は、主に五音音階を用いており、その中国の古制を踏襲した「工尺譜」という楽譜には、「乂、工、六、电、一」の五つ音によって音の高さが表記されるため、「五音」とも呼ぶようになったと考えられる。

まず、「弦管」の意味合いについて考えてみよう。かつて「南音人」——南音をする人たち——は南音の演奏を「佚佗弦管」と呼び、南音の愛好者を「弦友」と呼んでいた。弦管というのは南音演奏に使われる弦楽器と管楽器の編制に由来する言葉である。「佚佗」とは閩南語では中国語の「玩」(遊び)と同じ意味であり、南音で遊び、楽しむということである。現在においても、泉州の南音樂社ではみんなが集まって南音をすることを「玩南音」という。「弦友」「玩南音」などの表現から従来南音は上演のため音楽ではなく、みんなが参与して「自娛自樂」(みんなで一緒に音楽をし、自分たちを楽しむ)という音楽であることが明らかである。

次に南音の演奏形態についてみてみよう。南音演奏の大きな特徴の一つは「和」と「交流」を重視する。音の高さ、リズム、拍子、速度の調整より、南音の性質を理解しあうという心と音楽の調和である。このような特徴は演奏形態にも表れている。南音の演奏の基本的形態は図表1の通りで、楽器の演奏者が両側に、演唱者が真ん中に、拍板(拍子を打つ打楽器)両手に執つ、という対面形式になる。この形態は中国漢の時代「相和歌」からの継承が見られる。「相和歌」は漢の時代の民間の歌謡で、その名は「系竹更(こもご)も相和(わ)す、節を執(と)る者歌う」(弦楽器と管楽器の伴奏を伴い、拍子を打つ者は歌う)からきたと言われている⁷。南音の演奏形態は、つまり、琵琶、洞簫、三弦、二弦の「系竹」楽器の伴奏を伴い、「拍板」(節)を持っている者は歌うという形式に酷似している。南音は演奏の楽器によってまた演奏形態を「上四管」と「下四管」と呼ぶ。前者は基本的形態と同様である。後者の場合、図表2のように、基本的形態に「噴呐」、「響盞」「双鐘」「狗叫」「四宝」

⁶ 例えば、林霽秋編『泉南指譜重編』(1912年、上海)、許啓章、江吉四編『南樂指譜重集』(1930年、台湾)などがある。

⁷ 松家裕子(2001: 7696)

「木魚」⁸を加える。拍板を除いて全部で10種類の楽器で演奏することで、「十音」ともいう⁹。

図表1 基本的形式（上四管）

演唱者（拍板を持つ）	
琵琶	洞簫
三弦	二弦

図表2 下四管（十音）

演唱者（拍板を持つ）	
琵琶	噴呴
三弦	洞簫
響盞	二弦
双鐘	狗叫
四宝	木魚

南音の演奏者（演唱者）は多くの場合、歌の以外、すぐなくとも楽器が二つ以上できる。演奏者は曲によって楽器や歌の役割交替ができる。このような対面的な演奏形態は演奏の際に、すべての演奏者（演唱者）が互いに呼吸やリズムの調和を感じ合い、演奏者同士の相互作用によって音楽がシンクロできる。

第3に、南音音樂の特殊性から南音の実践者の多くは、演奏者であり、聴衆者でもある。南音は「指」、「譜」、「曲」に大別され、それらが組み合わされて演奏が行われる。「指」とは、歌詞、樂譜と琵琶演奏法などが含まれる組曲のことである。「譜」とは樂器による組曲である。「曲」は「散曲」ともいうが、南音の声楽曲の固有名称である。現在、残されている「指」はおよそ43組曲があり、組曲ごとに1つ、2つの物語がある。その内容は歴史の物語を中心とする。宋代から清代まで各時代の雑劇及び伝奇、民間伝説などに関連するものが多い。歌の場合、閩南語で歌う。樂譜は特有の工乂譜、または工尺譜と呼ばれ、「乂、工、六、思、一」の文字記号を使用する。この記譜法は先秦時代以来の伝統的音樂理論が民間に残された物である可能性が高いと言われている（王・劉 1989）。上記の内容から次のようなことが言える。①南音の指は歌唱と楽器が含まれる組曲として複雑で長い。②南音の工乂譜は南音の声楽と器楽の基礎となっており、声楽曲の場合閩南語で歌うのが基本である。このような特質から、南音は閩南地域という南音の土壤で育った人間でなければ、学習や理解も容易なことではない。南音活動の多くの場合、南音の実践者は交代で演奏するため、演奏者でありながら、聴衆者でもある。聴衆者には閩南人ファンも含まれる。

第4に、南音が「和」を重視するという特徴は儒教の中和（中庸）思想の影響を強く受けている。その影響が、中和的な特徴を備えた音樂そのものだけでなく、「礼」の規範を受けた儀式、パフォー

⁸ 「噴呴」（ダブル・リードの縦笛）、「響盞」「双鐘」「狗叫」「四宝」「木魚」は小さい鈴や鐘など、いずれも打楽器である。

⁹ 閩南地域では歌を伴わない樂器だけの演奏も「十音」と呼ぶ場合がある。樂器の種類が必ずしも備えなくとも、東南アジアで伝わった「十音」はこのタイプなものだと考える。

マンスなど、演奏に関連する活動の礼儀作法（祭祀、規則、禁忌など）および思想観念にも現れている。南音の世界では、最も重要な祭祀は「郎君祭」である。南音の呼称にも反映している。「朗君樂」という呼称は、南音楽社に祭られる南音の祖先とされる「孟府郎君」の名前に由来する。孟府郎君は唐代の後、五代十国時期における后蜀の主である孟昶のこと、かれは“喜狩、善彈、好屬文、尤工声曲”¹⁰ であった。後に宋代の太祖はかれを「朗君大仙」と号した。「朗君大仙」は中国の演劇界に祭祀されると同時に、南音の祖先と尊ばれる。それによって南音が「朗君樂」「朗君唱」と呼ばれたという。「郎君祭」は春分と秋分の年に2回、南音の団体によって催される。

3-2 南音の実践「場」としての南音楽社

南音を伝承する重要な組織は「南音楽社」（南音社ともいう。南音の団体、南音音樂社のこと。本稿では特殊な名称以外、南音楽社で統一する）である。実践と行為としての南音の活動領域である。「場」という活動領域は、ブルデューが指摘する「社会領域」（社会空間）の性質をもっている。ブルデューは『実践理性 行動の理論について』という著作では、社会空間（社会領域）とは実体論的ではなく関係論的に捉えられると強調する。社会空間とは明確に定義されて図式化されるものではなく、各行為者間の関係性を捉えていく中で浮かび上がっていくポジ（陽面）であるということである。ある種の性質（気質など）が「差異、隔差、弁別的特徴、要するに他の諸特性との関係において、かつそうした関係によってしか存在しない関係的特性にほかならない」という。この差異や隔差の概念は空間という概念の根底にあるとブルデューは指摘し、彼にとって空間とは「明確に異なりつつ共存する複数の位置の集合」にほかならない。「つまりたがいに相手の外部にあり、他の位置との相互関係において、すなわち相互的外在性によって、また近接関係や隣接関係、さらには何々の上にとか下にとか間にといった序列関係によって定義される、こうした集合のこと」である（ブルデュー 2007：20～21）。つまり、それぞれの社会領域には、独自の目的、価値観や権力関係があり、用いられる資本（経済資本、文化資本など）も異なり、行為者の役割関係や社交上の位置付けなども異なる。社会領域としての南音楽における目的は、行為者自身のために楽しむことである。この実践的な場としてどんな役割関係が見られるだろうか。

泉州地域¹¹では南音楽社のことを「館閣」ともいい、清の時代から泉州各地に存在していた。前述

¹⁰ 「狩が好き、楽器の演奏に長け、詩や文章などを書くのが好む。特に曲や歌なども上手である」（王耀華他編『福建南音初探』3頁、福建人民出版社、1989年。）

¹¹ 泉州市は鯉城区、豊澤区、洛江区、泉港区、晋江市、石狮市、南安市、惠安县、安溪县、德化县からな

のように、南音楽社のメンバーのことを伝統的に「弦友」と呼ぶ。地域や南音楽社によって、明確にしているわけではないが、流派の違いがある。「弦友」という構成員が自分の流派の芸の特徴を共有し、構成員のアイデンティティともなっている。南音楽社はその目的によって南音の活動を通して縦、横と内外的関係が創出されている。

1) 「開館」による上下関係（師弟関係）。「開館」は、南音の伝承において独特な形式である。伝統的には、南音楽社（あるいは南音が好きで習いたい人）が、資金を集め、社内或いは外部の南音の師匠に教室を開いてもらう。南音界ではこのようなことを「開館」という。「開館」の際、南音楽社（あるいは学習者）は縁起がよい日を選び、「館」になる場所（通常南音楽社）で「開館」の儀式を行う。開館式には南音の神である「郎君」の祭壇に線香、花、果物などを供え、祭祀を行う。館内の広間の正面には「郎君大仙」の像をかけ、両側に南音界の先賢の教えを書いた詩句を貼る。「郎君」祭祀の後、弟子入りの儀式を執行する。弟子入りの儀式の後に宴会を開き、師匠および師匠の「弦友」を招待する。宴会の後、師匠とその「弦友」に演奏をしてもらう。南音の師簫として、ある場所で「開館」の際に欠かせないプロセスの1つは、声望が高い南音楽社あるいは南音の名人、すなわち「弦友」を呼んで、一緒に「開館」をする「館」で演奏することである。それは自分の名をあげることでなれば、自ら技を見せることもある。

「開館」はレベルによって1週間から4ヶ月ほど期間不等である。かつて「開館」の期間中、師匠はともかく、師匠の「弦友」が館に来ることがあれば、学習者達は食事を招待する。食事の後、みんなで南音の会を開く。このような南音の会は「開館」終了後も開く。「開館」は、多少形式が異なるが、現在も見られる。海外においても原則的にこの形式を踏襲している。「開館」で一度弟子入りしたら、ほかの師匠に師事することができない。それは裏切る行為と見做す。このように開館によって南音楽社内の上下関係が出来上がっている¹²。

2) 「拍館」による横のつながり

「拍館」とは、同じ南音楽社メンバーによる活動をさしている。南音楽社は従来より南音の弦友が集まり、日常的に南音の会（演奏活動）をする場所である。活動の際に、時間も人数も正確に規定するわけではなく、行き来も自由であり、演奏スタイルの組合せも自由である。自分たちで楽しむということで、演奏を通じてメンバーの交流を重視する。時には楽社ではなく、メンバーたちが気楽に別の場所、例えば公園や寺院などで、南音の演奏が適切と思われる場所であれば、どこでも活動するこ

る地級（地区、地域レベル）市である。日本の行政区域概念と異なるため、本稿では泉州地域と称する。

¹² 王維（2007）、および泉州での現地調査（2023年8月）

とができる。たとえば、泉州にある「南音雅芸」という音楽社の場合、メンバーは泉州地だけではなく、北京、上海、福州などにも分布している。それぞれの地域に居住している泉州人もいれば、まったく泉州に関係ない学習者もいる。「南音雅芸」は現在泉州地域以外の人もメンバーとして受けている数少ない南音楽社の一つである。他の地域に居住している学習者に対して、日常的にオンライン形式で授業が実施されている。師匠（先生）は定期的に集まるメンバーだけで「開館」を行う。各地域におけるメンバーは、自分たちの都合にあわせて、適切な場所で定期的に「拍館」を行う。「南音雅芸」が北京にいるメンバーは10名ほど、そのうち半分が泉州の出身者で北京に居住しているのに対して、残りの何人かは泉州以外の出身者で、メディア関係や芸術、音楽の分野で仕事している者である。両者は普段の仕事や生活の環境がまったく異なり、本来なら接点がないのだが、「南音雅芸」の実践交流活動を通じて、同じ「南音雅芸」に所属するメンバーとしてのアイデンティティを持っている¹³。南音楽社の「拍館」は、参加者自身演奏者で観客であり、交替で演奏するという交流的な演奏スタイルをとるのが普通である。日常的な活動には、事前準備やリハーサルのようなものもなく、即興的に演奏や交流を行う。参加者の演奏レベルが高い低いに関わらず活動の場を持つ、或いはその場にいるという参与そのものは重要である。これはトゥリノの表現を借りると、「参与型の場面では、参与を動かすという目的や集団の关心を調和した多様な空間が準備されているが、それは結果的に、あらゆるタイプの参与者が気分よくその場でいられることに寄与している」(311)「拍館」を通してメンバーたちの横のつながりが築かれる。

3) 「拍館」による内外のつながり

「拍館」とは、ほかの南音楽社を訪問し交流演奏を行うことである。言い換えれば南音楽社の間の交流は「拍館」を通じて行われる。かつてこれを「拝館」といい、つまり「館閣」（楽社）と「館閣」の間に南音を競うことである。現在、この競争の意味合いを持つ「拍館」の代わりに、南音楽社間の交流を図る「拍館」という言葉を使うようになった。それは、泉州地域では、南音を習えば南音人、すなわち文化人になると、文化人同士であれば競争関係よりも交流関係が重要視される、南音の世界に入ったことが友だちや兄弟になることと同じである、という言い伝えがあるからなのだ。

ここで一つ「拍館」の事例を紹介する。前述の「南音雅芸」は2023年8月に、晋江市東石鎮（泉州地域）にある「三余閣」という南音楽社にて「拍館」を行った。当日、師匠の蔡雅芸を含む泉州にいる「南音雅芸」のメンバー20人が「南音雅芸」を象徴するTシャツを身につけて参加した。「三余閣」側の参加者は7名で全員が20年以上の南音歴を持つベテランの演奏（唱）者であった。

¹³ 「南音雅芸」における現地調査による（2023年8月）

「拝館」の開始前、蔡雅芸はまず「郎君」の祭壇前に進み礼拝をした（写真 1）。それからホスト（「拝館」先）の挨拶の後、「南音雅芸」のメンバーによる最初の曲を演奏する。その後、相互交替で演奏をしていき、最後に相互の代表による合同演奏が行われた（写真 2）。



写真1：「郎君」祭壇前のお辞儀

写真2：「三余閣」にて「拝館」の様子



写真3：参加者の集合写真

その場にいる全員は演奏者であり聴衆者である。終了後、南音雅芸のメンバーを中心にご当地の料理で会食する¹⁴。このように、「拝館」は南音楽社にとってそれぞれの南音楽社の全体のレベルや演奏の技法などの情報交換の重要な場である。「拝館」は南音の技芸向上と伝承に大きな役割を果たすだけでなく、南音楽社間の内外のつながりと「弦友」の間との友情（横のつながり）を深めることもできる。

4) 実践的場の多様化と役割関係

南音は本来、民間伝承芸能である。職業的な演奏家は存在しなかった。中華人民共和国の建国後、

¹⁴現地での参与観察による（2023年8月16日）。（全員写真を除く）写真は筆者による。

政府の支援により「泉州南音楽団」「廈門南音楽団」のような南音の職業的音楽集団が設立され、南音は初めて芸術音楽として舞台に登場した。南音の専業的な集団の設立によって、街角や公園など参与的な場面によって準備された空間には芸術の舞台が加えられた。すなわち、参与型の伝統（特徴）を持つ南音は、非参与的な聴衆向けに上演型の形式に変化した。中国大陸の南音の活動は文化大革命時代に一時活動が停滞したが、1970年代末から復興活動が始まった。その影響を与えたのは他でもなくシンガポール湘靈社の活動、とくに交流の目的で実現された国際的南音大会である。1980年代からは政府が積極的に南音の興隆に力を注ぎ、各地方自治体や小中学校などの教育機関でも南音が取りあげられ、現在学校も伝承の場となっている。泉州地域では青少年向けの学校だけではなく、定年退職者向けの「老年大学」でも南音を習うことができる。教師となるのは、地域にある南音楽社の師匠たちである。学校で南音を習うメリットとしては、伝統的南音楽社の一人の師匠に縛られることがなく、さまざまな南音のプロの技を習うことができる。さらに、プロの南音人を育成するために、福建省では泉州芸術学院や廈門芸術学院などの芸術大学にも南音専門課程を設けている。このように南音の実践的な場は多様化してきている。とくに泉州および廈門政府は、2年ごとに国際南音大会を開き、台湾、香港および東南アジアからの南音楽社の参加を呼び寄せている。南音を中心とした文化活動の拠点である南音の伝承組織は、現在南音楽社、専業的音楽集団および学校となっている。実践的な場の多様化により、①南音楽社と政府、プロの楽団、学校との縦と横のつながり、②国際大会を通じた国内外のつながりなど、南音および南音楽社の役割と関係性も重層化になっている。

4 マレーシアにおける南音楽社

4-1 南音はなぜ、海外へ伝わっていたのか

南音の発祥地である泉州は、宋と元の時代（10～14世紀）に東アジアと東南アジアの貿易ネットワークの中心地であった。泉州は、川と海が交わる位置であり、水陸のネットワークにも適している地でもあるのが特徴で、歴史的な海のシルクロード沿いの世界最大の港の一つだった。このような特徴から、2021年、泉州は「宋元中国の世界海洋商業貿易センター」として、世界文化遺産の一つに登録された。

泉州は16～18世紀の東アジア海上貿易圏においても、重要な位置を占めていた。この時期に興った海外貿易ブームに乗って、泉州及び閩南地区全体に歴史上最も盛んな海外移民の波が現れ、それは20世紀前半まで続き、結果として数え切れない程多くの閩南移民が東アジア海域の広範な区域と台湾に分布することになった。そのため、中国において有数の華僑の故郷として知られている。

最新のデータによれば、泉州を中心とする閩南系の華人はおよそ950万人で、170余りの国家と地域

に分布している。その多くは東南アジアの国々に居住している¹⁵。マレーシアでは閩南系の華人の居住人口が300万人強を占め、最大のサブエスニックグループとなっている¹⁶。シンガポールの場合、2022年の統計によると、全人口の566.3万人のうち、華人人口が74.1%を占めており、閩南系の華人の割合が華人人口の41%ほどを占めている¹⁷。

南音は中原から東へ移り古代泉州に定住した移民たちと同様に、泉州地域を中心とする閩南系華人の集団移住とともに、海外、とくに東南アジアに伝わっている。

4-2 南音の行為者はどのような人たちなのか——マレーシアの場合

2020年の国勢調査による、マレーシアの総人口は約3230万人。うちマレーシア人が2960万人で、外国人が270万人。マレーシア人のうちマレー人が（ブミプトラ系少数民族も含む）2070万人（69.7%）で、華人が680万人（22.9%）、インド人が190万人（6.6%）、その他が2万3770人（0.8%）である¹⁸。1970年の調査では、総人口1040万人。ブミプトラが55.6%、華人33.9%、インド系9.0%、その他1.5%だったことから、この50年間の人口増加に伴い、民族構成比の変化が生じている¹⁹。2010年国勢調査の結果でも示したように、華人系人口は減少しつつあることがわかる。

マレーシアのマレー半島には昔から、起源を異にするさまざまな民族が訪れていた。15世紀初頭、中国とインドの交易ルートの中継点であったマラッカ王国には、中国やインド、アラブなど、さまざまな地域から商人が訪れていた。マラッカ王国時代では、中国系移民の増加に伴い、数百人の華人コミュニティが形成された。華人の男性と、現地マレー系女性の通婚も見られ、いわゆるプラナカン文化がこの時期から生まれた（山本 2016：298-299）。16世紀からのポルトガルとオランダの支配を経て、

¹⁵ 泉州網 https://www.qzwb.com/gb/content/2021-12/17/content_7120076.html 2024年9月25日閲覧

¹⁶ <https://zh.wikipedia.org/zh-cn/%E9%A6%AC%E4%BE%86%E8%A5%BF%E4%BA%9E%E8%8F%AF%E4%BA%BA> 2024年9月25日閲覧

¹⁷ シンガポールの国勢調査 <https://www.singstat.gov.sg/publications/population/population-trends> 2024年9月25日閲覧

¹⁸ <https://www.statista.com/statistics/1017372/malaysia-breakdown-of-population-by-ethnicity> 2023年9月27日閲覧。
2010年の国勢調査結果では、総人口2830万人のうちマレーシア国民が91.8%（約2600万人）、ブミプトラが67.4%、華人24.6%、インド系7.3%、その他0.7%であった。Department of Statistics, Population and Housing Census, Malaysia 2010。

¹⁹ Department of Statistics, Population and Housing Census, Malaysia 1970.

18世紀の後半よりイギリスの勢力は徐々にマレー半島に入ってくる。1785年に、イギリス人はペナンを開港して、華人地区を設け、華人商人は家を建てそこに定住した。華人の移民が増加すると、華人地区では原籍地による適当な棲み分けが行われた（莊 2014：23）。イギリスの支配下で19世紀以降の錫生産および20世紀初頭以降の天然ゴム生産が盛んになると、年に数万人が労働者として中国からマラヤに渡った（山本 2016：298）。

周知のように、華人移民は基本的に同郷集住の状態を呈していた。華人社会の境界線は主に方言グループとその方言地域を基にして出来上がる。最初の移住者が成功すると一族、同郷を呼び寄せ、方言グループを基にしてできたコミュニティは短期間で拡大し、一勢力となる。華人がマラッカで1673年に建てた「青雲亭」は、福建華人にとって重要な集会所としてさまざまな役割を果たしてきた（莊 2014：25-26）。初期のマレーシア華人社会は福建人特に閩南系福建人が多かったことが明らかである。マレーシアは、植民地時代の劇的な変化を経て、1963年に独立した。1970年代に入るとブミプトラ政策が導入され、華人は非ブミプトラという制約の中でも、それを受け容れながら自身の立場や利権を守っていった。マレーシアがマレー人優遇政策を実施していることは、戦後マレーシア華人組織が次々と設立された重要な外的要因であった。華人は政治的において不利な地位に置かれ、経済から教育まで制限を受けた。これにより、華人はエスニックな意識を強め、団結し、華人社会全体の地位を向上させるため、さまざまな団体を組織した。これらの組織の大半は出身地や職業など、血縁、地縁、業縁を紐帶とするもので、政治、経済、文化など、さまざまな面で役割を果たしていた（鄭 2014：457-461）。南音のような伝統音楽や伝統祭祀なども出身地ごとの組織によって維持し伝承してきた。すなわち、マレーシアにおける南音の担い手（行為者）はおもにサブ・エスニック・グループの一つ閩南系の人たちである。

4-3 マレーシアにおける南音楽社の歩み

マレーシアの南音に関する調査研究は少ないため、資料が乏しい。ここではごく限られた資料および現地調査に基づき南音組織の概観をまとめておく²⁰。マレーシアの南音楽社の誕生は1880年代に遡

²⁰ 主な資料は次のようなものである。『新加坡晋江会館記念特刊』（1978）、『馬來西亞福建社團連合会 文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大會奏特刊（增刊）』（1981）、『馬來西亞福建社團連合会 文化部南樂組主辨 第1回全国南樂歌唱比賽記念刊』（1983）、『特刊 瓜雪暨沙白縣福建會館南音樂團成立5周年及馬來西亞國際南音匯演』（2011年）、黃志偉（2018）「論福建南音在馬來西亞的傳承和發展」（『音樂天地』4：47）である。資料以外、現地調査（2023年3月、6月-7月）

る。初期の南音組織は、閩南出身者の宗親会（地縁組織）、同郷会館（地縁組織）、または職業公会（同郷者の業縁組織）に付属していることが多かった。例えば福建会館の康楽組、あるいは音楽組の活動の一部となったり、会館の南音組、南音社として独立した南音組織もある。1883年に閩南晋江東石鎮の出身者が設立した霹靂²¹太平仁和公所の南音組は現在知られているマレーシアで最も古い南音組織である²²。マレーシアにおける晋江人は約3万人いるが、そのうちの半数近くタイピン地域に居住している。タイピンに移住した晋江人の先駆者はほとんど東石の出身で、1880年代とくにタイピンの鉱山の労働力として働いていた。同郷者の互助と団結のために、1883年に、東石出身者を中心に、太平仁和公所の前身とされる「太平仁和公司」を設立した。1920年に太平仁愛公所に改名した。東石出身者の中にはのちにタイピンからクアラ・カンサーやクランタン州に移住した²³。

当時の活動についてあまり詳細な記録がないが、最初の南音組織として異郷地での厳しい日々を過ごしていた同郷者を楽しませ、後の南音の継承にも寄与したという。1936年12月イギリスジョージ6世が即位の際、マレーシアでは祝賀イベントが多く開催された。その際、太平仁和公所の南音も登場した。1941年にシンガポールから南音の先生を招き、会員達に南音を指導したことで、しばらく南音の盛況をもたらした。その後、先生がシンガポールへ戻り、指導者不在によって活動中止に至った。戦後の1945年より活動再開の動きもあったが、1955年に後継者不在ということで活動が中止となった（蔡 1981）。

太平仁和公所の次に設立されたのは泉州地域永春の出身者による巴生²⁴永春公所（1892）である。永春公所では南樂隊、花鼓隊が設置され、南音の活動はとくに1950、60年代において活発的であった。その後一旦沈滞化に陥ったが、1977年のアジア南音大会（後述）をきっかけに、1978年に永春公所を永春会館に改名し、南音の活動を再開した。とくに若い世代の育成に力を入れた²⁵。永春会館南音隊

²¹ペラ（Perak）州の中国語読み。

²²2011年にセランゴール州のサバッ・ブルナム（Sabak Bernam）のセキンチャン（Sekinchan）で開催された国際南音大会の会誌『特刊 瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団成立5周年及馬来西亞国際南音漬演』（2011年）による。

²³「仁和」という言葉について2つの説明がある。すなわち、東石鎮は昔「仁和里」と呼ばれていたこと、「仁和」の言葉自体には「助け合い」という意味合いがあること、のために「仁和公所」と名付けられたという（新加坡晋江会館 1978：547-550）。

²⁴クラン（Klang）の中国語読み。マレーシアのセランゴール州にある都市である。

²⁵関係者の話では、当時南音楽隊のメンバーは高齢者が多く、息子の世代が仕事で忙しく会館の活動に参加

は1981年にクアラルンプールで開催された東南アジア南音大会にマレーシアの代表団体の一つとして参加した。大会の資料では、マレーシアの南音社に共通することだが、活動の参加者は60代か、10代の若者が多かったことを示した²⁵。そのため、後に中堅者の高齢化や子ども世代の卒業後の進路などで、南音活動の衰退を余儀なくされた会館は多かった。永春会館はその一つである。会館の一部のメンバーは同地域にある同安会館（後述）に吸収された。

マラッカでは1931年に設立された馬六甲²⁶同安金廈会館の南音組（1931）は、途中何回も活動が中断したりしたが、マレーシアでは最も知られている組織として、1980年代末まで活動をしていた（詳細について後述）。

その他、1930年代に設立した南音組織は、馬六甲沁蘭閣、雲林閣、マラヤ漁業公会の音楽組、馬六甲桃源俱楽部、麻坡²⁷桃源俱楽部がある²⁸。これらの南音組織は異境地における閩南人の日常（娯楽）と非日常（冠婚葬祭）にとって欠かせない存在であった。しかし、こちらのいずれも戦争および他のトラブルによって、活動は中止となっていた（蔡 1981）。

マレーシア華人社会は福建人特に閩南系福建人が多かったため、戦後間もない南音楽社の活動が復興されていた。1963年のマレーシア独立前までに設立された南音楽社は、いずれも閩南地域の地縁会

できないが、彼らはその孫達およびその友たちに南音を教えていた。週末になると、会館はマイクロバスを借りて、子どもたちが通っている学校まで迎えに行った。日曜日の午前中会館で南音を練習した後、みんなと一緒に美味しい食事を食べに行く。同郷者および親しい人の葬式を賑やかにするのは閩南地域の昔からの習慣であった。その際に南音などの音楽演奏も欠かせない。葬式で演奏するのは永春会館の南音組の活動の一つであった。その際、子どもたちも参加し、謝礼まで渡されていた。子ども達にとって、みんなで一緒に美味しいものが食べられ、お金ももらえるため、いつも喜んで南音活動に参加したという（巴生雪隆同安会館南音組張啓智氏の教示による（2023年7月7日））。

²⁵『馬来西亞福建社團連合会 文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大会奏特刊（増刊）』（1981）

²⁶マラッカ（Melaka）の中国語読み。

²⁷ムアル（Muar）の中国語読み。ジョホール州にあるマレーシアで最も古い町である。

²⁸2011年にセランゴール州のサバッ・ブルナム（Sabak Bernam）のセキンチャン（Sekinchan）で開催された国際南音大会の会誌『特刊 瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団成立5周年及馬來西亞國際南音匯演』（2011年）による。

館や寺院に属した太平錦和軒(1945)、安順³⁰福順宮（1951）、吉蘭丹³¹仁和音楽社南音団(1960)などであった。

マレーシアが独立後、最も早く設立したのは、「太平仁愛音楽社」(1963)であった³²。1960年代から70年代に、業縁組織である巴生の黃梨廠(パイナップル工場) 南樂部、橡胶(ゴム)公会、顏氏公会、廈門公会、金門公会なども南音活動があった³³。

1977年、シンガポールの湘靈音楽者は南音の復興を図り、東南アジア地域を中心に国際南音大会の開催を試みた。その背景には、1965年にシンガポールが独立してから、南音が急速に衰退したことがある。湘靈音楽社は1970年代南音が直面している衰退状況を鑑み、シンガポール南音の復興を果たすために、閩南人が多くかつ南音楽社もあるマレーシアとフィリピン、インドネシアなど東南アジアの国との協力が必要であると考えた。そこで、湘靈音楽社は同郷の実業家に声をかけて援助資金を集め、当社創立37周年を迎えた1977年9月にシンガポールで第1回アジア南音大会を開催することになった。その企画にいち早く応じ参加したのは、マレーシアのマラッカ同安金厦会館と吉蘭丹など地域の南音楽社、そしてフィリピンマニラの南音社、インドネシアの南音爱好者³⁴であった。大会の際に南音の交流を図るために、南音の横のネットワークとして各国の南音団体による南音聯誼会が作られ、2年ごとに南音の国際大会を開くことが決定された。1979年に、台湾と香港の南音楽社の参加も呼びかけて、マニラで第2回南音大会が開催され、次の大会をマレーシアのクアラルンプールで開催することが決定された。第3回東南アジア南音大会を開催するために1980年に、マレーシア福建社団聯合会はその文化部に南音組を設立し、大会の準備を進めていた³⁵。

これまで南音楽社の活動は、団体ごとに行い、横の連携がほとんどなかったため、このアジア南音大会は歴史を開き画期的なことであった。この大会を皮切りに、南音大会という形式の大会は各国でさまざまな形で行われるようになった。その影響はとくに南音の故郷である中国の泉州地域に及び、1981年の元宵節(旧正月15日)に泉州と廈門で南音大会が行われた。それによって、10年以上沈静

³⁰ テロックインタン(Teluk Intan)の中国語読み。ペラ州にある都市。

³¹ クランタン(Kelantan)州の中国語読み。

³² 『新加坡晋江会館記念特刊』1978: 570

³³ 巴生雪隆同安会館南音組張啓智氏の教示による(2023年7月7日)

³⁴ 当時当局の取締りで華人組織のほとんどは閉鎖されたため、組織として参加ではなく、個人参加となった。

³⁵ 劉秋啓(1981)「第3界南音大会奏籌備過程及感言」『馬來西亞福建社団聯合会 文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大会奏特刊(増刊)』42-44頁

化になった中国本土の南音が蘇って、その復興、創造、研究の道を歩みはじめ、世界無形文化遺産になるまで発展してきた。

このような背景の下で、1978年から1980年代初期にかけて、ジョホール州にある新文龍永春会館をはじめ、巴生雪蘭莪³⁶永春会館南音組（1978）、巴生同安会館南音組（1978）と雪蘭莪適耕莊³⁷雲宵音楽社（1978）、巴生螺陽（泉州惠安の別称）音楽社、巴生浯協進社（金門出身者の会館に所属）音楽組、江沙³⁸芸群音楽社、江沙仁和公所、班達馬蘭³⁹新韻音楽社、班達馬蘭福進宮、五条港⁴⁰同安聯誼、峇株巴轄⁴¹南樂社、馬六甲晋江会館、馬六甲興安会館、森甲柔⁴²南音樂団、怡保⁴³福建会館、華都牙也⁴⁴福建会館などの南音組織が次々と設立された。当時は閩南人が集住する場所であれば、どこでも南音の活動が見られた。主な活動は会館や寺院にて同郷者の参与による日常と非日常の活動、国内外の南音楽社との交流活動も行ってきた。1981年に第3回東南アジア南樂（南音）大会がマレーシアのクアラルンプールで開催された際に、マレーシアから馬六甲同安金廈会館の南音組、巴生雪蘭莪永春公所南音組、巴生雪蘭莪同安会館南音組、雪蘭莪適耕莊雲宵音楽社、太平仁愛音楽社および吉蘭丹仁和音楽社南音団が参加した⁴⁵。これらの南音組織はとくに青少年の育成にも力を入れた。

しかし、本土出身の第1世代の減少、すなわち世代交代、西洋化によって生活リズムや娯楽生活の変化などで、1990年代～2000年代半ば頃まで、多くの南音楽社の活動は中止となった。それまで30ほどの団体が活動していたが、2000年代初期になると、その活動が続いているのは馬六甲同安金廈会館南音組の一部会員と巴生雪蘭莪同安会館の南音組のみであった。前者の方も次第に沈滞化になっていった。

³⁶ セランゴール(Selangor)州の中国語読み。

³⁷ セランゴール州にあるセキンチャン（Sekinchan）という町の中国語読み。

³⁸ ペラ州クアラ・カンサー（Kuala Kangsar）町の中国語読み。

³⁹ セランゴール州クランにあるパンダマラン（Pandamaran）という町の中国語読み。

⁴⁰ セランゴール州クラン港に近いスンガイリマ（Sungai Lima）という漁村の中国語読み。

⁴¹ ジュホール州の州都バトゥー・パハト（Batu Pahat）の中国語読み。

⁴² 森甲柔とは、ヌグリ・スンビラン州（中国語では森美蘭と呼ぶ）、マラッカ（中国語では馬六甲と呼ぶ）、ジョホール州（中国語では柔佛と呼ぶ）三つの州の中国語の省略形である。

⁴³ ペラ州の州都イポー（Ipoh）の中国語読み。

⁴⁴ ペラのキンタ地区にある町バトゥ・ガジャ（Batu Gajah）の中国語読み。

⁴⁵ 『特刊 瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団成立5周年及馬来西亜国際南音演』（2011年）による。

図表3 マレーシアにおける南音組織の変遷

名前	成立年代	地域	備考
太平仁和公所南楽団	1883	ペラ州タイピン	当時の活動について不詳。1936年マレーシアのイギリスジョージ6世即位の祝賀行事に参加。指導者不在により一時活動中止。1945年に活動再開。1955年に後継者不在により活動が中止
巴生永春公所南楽組	1892	セランゴール州クラン	当初南楽組、花鼓隊が設置。1981年国際大会に参加
馬六甲同安金廈会館	1930	マラッカ	太平仁愛音楽社、吉蘭丹仁和音楽社と並び三大音楽社
馬六甲沁蘭閣	1930年代	マラッカ	活動とその期間は不詳
雲林閣	同上	マラッカ	活動とその期間は不詳
マラヤ漁業公会音楽組	同上	マラッカ	1930年代において、ペナン、イポー、タイピンなどの地域で活躍。団体内部の原因により活動中止
馬六甲桃源俱楽部	同上	マラッカ	馬六甲同安金廈会館と並び活躍的な団体
麻坡 桃源俱楽部	同上	ジョホール	馬六甲桃源俱楽部の支部となる。活動は断続的
太平錦和軒	1945	ペラ州タイピン	清朝初期に興った秘密結社「洪門」系統。設立後2年間活動が継続したが政治的取締によって解散
安順福順宮	1951	ペラ州テロックインタン	メンバーの日常と寺院の祭祀、冠婚葬祭の非日常の活動もした。指導者離れにより活動中止
巴生黄梨廠南楽部、橡胶公会、顏氏公会、廈門公会、金門公会	1950年代～	セランゴール州クラン	1950年代から1970年代にかけて断続的活動。
吉蘭丹仁和音楽社	1960	クランタン州	馬六甲同安金廈会館、太平仁和音楽社と並び三大音楽社
霹雳江沙仁和公所	同上	ペラ州クララ・カンサー	太平仁愛公所の名称を援用し、南音部も設置した。
太平仁和音楽社	1964	ペラ州タイピン	馬六甲同安金廈会館、吉蘭丹仁和音楽社と並び三大音楽社。
新文龍永春会館	1970年代末	ジョホール州	活動とその期間は不詳
雪蘭莪適耕莊雲宵音楽社	1978	セランゴール州セキンチャン	設立後地域で活躍。1989年資金と人材不足で解散。
巴生雪蘭莪同安会館南音組	1980	セランゴール州クラン	前身は巴生黄梨廠南楽部は、後継組織は巴生雪隆同安会館南音組
巴生螺陽音楽社	70年代末～80年代初期	セランゴール州クラン	活動とその期間は不詳
巴生活協進社音楽組	同上	セランゴール州クラン	活動とその期間は不詳
江沙芸群音楽社	同上	ペラ州クララ・カンサー	活動とその期間は不詳
班達馬蘭新韻音楽社	同上	セランゴール州クラン	活動とその期間は不詳
班達馬蘭福進宮	同上	セランゴール州クラン	活動とその期間は不詳
五条港 同安聯誼	同上	セランゴール州クラン	1983年に全国南音大会の中部予選の主催者
柔佛峇株巴轄南楽社	同上	ジョホール州	活動とその期間は不詳
馬六甲晋江会館	同上	マラッカ	活動とその期間は不詳
馬六甲興安会館	同上	マラッカ	活動とその期間は不詳
怡保福建会館	同上	ペラ州イポー	活動とその期間は不詳
華都牙也福建会館	同上	ペラ州キンダ地域	活動とその期間は不詳
福建社団聯合会文化部南音組	1980	クアラルンプール	国際大会開催のために設立。大会の主催者
森甲柔南音楽団	同上	マラッカ	1981年国際大会後設立。マラッカ、ヌグリ・スンビランとジョホール地域を包括した組織。1983年の全国大会の南部予選の主催者
瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団	2006	セランゴール州セキンチャン	雪蘭莪適耕莊雲宵音楽社はその前身。現在マレーシアで最活躍団体、メンバーは30名弱、
巴生雪隆同安会館南管音楽組	2008	セランゴール州クラン	巴生雪蘭莪同安会館南音組より再構成。現在のメンバーは張一族の10人未満。

出典：『新加坡晋江会館記念特刊』（1978）『馬來西亞福建社團連合会文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大會奏特刊（増刊）』（1981）『馬來西亞福建社團連合会 文化部南樂組主辨 第1回全国南樂歌唱比賽記念刊』（1983）、『特刊 瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団成立5周年及馬來西亞国際南音演』（2011年）現地調査（2023年3月、6月-7月）

2000年代の半ばに入ってから、ようやく復興が見られたのは、瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団（前

雲宵音楽社) (2006) と巴生雪隆⁴⁶同安会館南音組 (前巴生雪蘭莪同安会館南音組) (2008) の再設立であった。

図表3で示したように、1) マレーシアにおける南音の歴史が長く、団体の数も多いが、その活動が断続的であるため、活動の詳細についての記録が少ない。2) 南音の団体は大抵ペラ州、セランゴール、マラッカに集中している。このことは、太平における南音組織の項で述べたように、歴史上閩南晋江東石鎮からの移民の移住経緯に関連する。3) 閩南地域から華人第一世代の移住は、国内外の政治事情により1950年代末で中断となり、中国の改革開放後の新移民が到来するまで、20年以上の空白があった。故郷の文化的背景を持つ第1世代の高齢化や不在であることは、1990年代より南音が急速に衰退した要因の一つである。

4-4 南音の担い手とは

4-4-1 かつての三大音楽社——「馬六甲（マラッカ）同安金廈会館」⁴⁷、「吉蘭丹仁和音楽社」、「太平仁愛音楽社」

マレーシア閩南系華人の音楽社は、活動の多くが平劇や閩劇、梨園戯と高甲戯のような地方劇である。1960年代から70年代にかけて最も活躍的だったのは、三大音楽社と呼ばれる馬六甲同安金廈会館、吉蘭丹仁和音楽社と太平仁愛音楽社であった。音楽社に共通することだが、社内に「音楽組」（主に南音や十音）、「地方劇組」（梨園戯と高甲戯）、華樂（民族音楽）隊、洋楽隊、華語（中国語）の歌劇、歌舞隊、芸能隊、バスケットボール隊、卓球隊などを包括した「康樂組」などの文化活動のグループが設置されている。三大音楽社を中心とする音楽社は、各地域における閩南華人たちにとつて日常生活の娯楽から非日常的な冠婚葬祭まで欠かせない存在であった。とくに三社の交流活動が盛んであった。その内容は①互いに訪問しあい、いわゆる「拝館」の活動、②地域の福利慈善や教育寄付行事、国内外の同郷会館の記念イベント⁴⁸、寺院の定例祭事などがある時、互いの応援演奏活動、

⁴⁶セランゴールの別称（中国語読み）、時々、セランゴール、プトラジャヤとクアラルンプールを合わせた呼び方（併称）として使われる。

⁴⁷馬六甲（マラッカ）同安金廈会館について、『馬來西亞福建社團聯合會 文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大賽奏特刊（增刊）』（1981）、『馬來西亞福建社團聯合會 文化部南樂組主辦 第1回全國南樂歌唱比賽記念刊』（1983）、現地調査（2023年6月）による。

⁴⁸たとえばクランタンの中華総商会が落成したときやペナンの晋江会館の周年記念式などの際、3社はともに出演していた。その交流活動はシンガポールまで広めていた。

③1977年から80年代半ばまで、マレーシアの代表チームとして国内外の南音大会の参加、などである。三社のうち最も早く設立し、マレーシアにおける南音活動の全体に影響を与えたのは、1931年に設立した馬六甲同安金廈会館（以下同安金廈会館と称す）である。中断しながらも現在まで活動が続いているのは太平仁愛音楽社である。ここではこの2社の特徴だけを紹介しておく。1960年に東石出身者がクランタンで設立した、仁和公所（1883）の系統を引いた「吉蘭丹仁和音楽社」は、上記の2社との共通性が比較的に多いため、省略する。

1) マラッカ同安金廈会館

1931年に設立した同安金廈会館は設立当時から、教育事業の援助を中心に南音を含めて文化活動が盛んであった。南音の活動が戦争により一旦中止となった。戦後、同会館の南音の復興にあたって中心的な役割を果たしてきたのは、マラッカ華人社会の中心人物である拿督^④楊朝長だった。

楊朝長は1921年福建省同安県に生まれ、5歳の時、母とともにマラッカの父のもとに渡った。7歳でマラッカの福建会館や徳化会館の私塾、伝統的中国語や中国文化を習った。11歳で帰郷し、17歳で再びマラッカに渡った。その間、マラッカと故郷の私塾で伝統的な教育を受けた。これらの学習はかれの伝統文化の基礎を作った。戦後から1990年代まで、楊朝長は父のゴム業などの事業を継いで国際企業まで成長させた。楊朝長は「義を重んじ財を軽んじ」、とくに民族教育、文化芸術、慈善事業などの社会公益活動に対して熱心であった。

楊朝長は幼い頃から父の影響を受け、南音が好きだった。南音琵琶だけではなく、シンガポールとマレーシアの南音界で洞簫の第一人者と言われるほど洞簫に長けていた。彼は、仕事が終わった後、よく「弦友」たちと一緒に会館で夜を南音で過ごしていた。青年時代の彼はアマチュアの役者として演劇の舞台でも活躍していた。アジア太平洋戦争の真っ最中、家族とともに避難した時、貴重なものでさえ捨てなければならなかつたが、かれは二弦と洞簫だけは常に持っていた。戦後、楊朝長は南音の復興に力を入れて、南音をマレーシア華人を象徴する民族芸術にしようとしたし、同安金廈会館南音組をマレーシアを代表する南音団体まで育てていた。同安金廈会館南音組は1950年代から1970年代までの20年間に、マレーシアでもっとも活躍的な南音団体として、頻繁にマラッカ（馬六甲）のラジオ番組に出演し、マレーシアの各地で交流演奏などの活動をしていた。当時の関係者によると、当時南音のラジオ放送はクアラルンプールまで届き、生で南音を聞くために、クアラルンプールからマラッカの同安金廈会館まで足を運んだ人も少なくなかつたという。特に青少年の育成に力を入れて、何水

^④ダトウク（Datuk）の中国読み、ダトウクはインドネシア、マレーシアで使われるマレー語の称号で、地位や名誉がある人に対して尊敬する意味を示す。

娘、陳秀珍、陳納莉、林秀英、楊清模など多くの有名な南音歌手もその時に誕生した。これらの歌手、例えば陳秀珍や何水娘はのちに復興した南音楽社（仁愛音楽社など）の指導役も担当した。

1977年シンガポール湘靈音楽社が第1回アジア南音大会（のちに東南アジア南音大会を改名）を主催した際に、楊朝長は自ら出資して、同安金廈会館南音組を率いてマレーシアの代表として大会に参加した。1979年に同南音組は再度マレーシアを代表してフィリピンのマニラで開催する第2回東南アジア南音大会に参加した。マレーシアで開催する第3回のアジア南音大会のために、楊朝長は1981年にマレーシア南部を代表する「森甲柔南樂社」の創立、マレーシア福建社団連合会文化部「南樂組」の設立を促進した。彼の企画と努力により、1981年8月にクアラルンプールで第3回東南アジア南音大会が開催された。1983年12月にマレーシアで第1回全国南音歌のコンクールが開催された。以後、何度も開催され、南音界の新進気鋭を育ててきた。1986年以降、楊朝長の引退とともに、マラッカの南音も衰退の道を辿ることになった。それ以来、同安金廈会館南音組の復興がみられなかつたが、それまで、マレーシア華人社会における南音の継承と発展に楊朝長および同会館が果たしてきた役割は大きい。

2) 太平仁愛音楽社

太平仁愛音楽社は1964年にタイピンで設立した。設立の際に、同安金廈会館と仁和音楽社はともに設立記念式に参加し演奏した。仁愛音楽社が設立の前に、楽器や歌ができる同郷の愛好者たちは、よく集まって「十音」を演奏したり、地方劇を歌ったりしていた。設立の当初から「折子戯」といった劇の抜粋を演じていたように、地方劇を通じて人気を集めた。梨園戯や高甲戯のような閩南地域の地方劇の中では、南音に共通する曲が多かった。1960年代においては、それ以前に大陸から渡ってきた閩南出身者が多く、故郷の劇や音楽に親しみがあったので、各音楽社の活動は比較的人気があった。当時は、仁愛音楽社など三社の活動はかなり活発的で、マレーシアの各地におけるさまざまな行事や祭祀にも参加した。1970年代に入って一旦沈滞化したが、1977年のアジア南音大会の影響で、仁愛音楽社の活動が復活し、活発になっていた。1978年の時点ではメンバーの数は300人を超え、1981年と1983年の南音大会の参加団体の一つになった。しかし、他の音楽社と同じような背景で1980年代末から活動は徐々に衰退していくが、不定期でありながら、音楽愛好者だけはぼちぼち活動をしていた。南音に関する活動の再開は2010年代半ばだったという。その中心人物は音楽社の事務局長許隆基である。

許は南音との縁は仁愛音楽社の指導者である蔡長仁に関係していた。2023年で83歳となる蔡長仁は1957年に大陸からマレーシアにわたった華人最後の第1世だったという。父親の影響や故郷で聞いた音楽を覚えていたため、仁愛音楽社に入った。笛などの楽器が達者であったため、のちに音楽指導者

になった。1990 年以降マレーシアから多くの華人は中国福建で投資したり、商売をしたりしていた。蔡も 2000 年から 2012 年ごろまで、泉州で商売をしていた。その時、仕事の合間によく南音楽社を通じて南音を聞きに行った。仕事を引退してから音楽社に戻り、少ない爱好者と一緒に音楽を楽しんでいた。蔡は許と同じ地域に居住しているが、仁愛音楽社まで 1 時間以上の距離がある。許は高齢者になつた蔡をよく車で送り迎えしていた。2015 年の当時、許の母親はすでに 90 歳になつた。母親を喜ばせるために、許は歌を習い始めた。いつも音楽社で習つた歌を母親に聞かせて喜んでもらつた。音楽社の活動に半年間参加しているうちに南音に関心をもつようになり、洞簫を習い始めた。なんとかこ

の音楽の伝統を守つていきたいという使命感も生まれていた。しかし、すべて手探りで南音を教える指導者がいなかつた。



写真4、5 孟昶先師の祭祀における祭壇と演奏（2023年3月）

2017 年に偶然、大陸と台湾で活躍している、マレーシア出身の林素梅がペナンに来ることを知り、許は自らペナンに林を訪ね、指導を求めたところ自分たちの南音は多くの間違いがあったことを教えてもらった。2018 年にマラッカ晋江会館の周年記念式では、シンガポール伝統音楽社（指導者呉玲玲）による南音の演奏があつた。許は自ら一曲を披露したうえ、呉に仁愛音楽社の訪問をお願いした。呉は、その招聘を受けて、仁愛音楽社を訪れ社員たちに南音を教えた。その際、自分が持ってきた南音琵琶も音楽社に贈った。その後、許は泉州師範大学の先生にオンラインの講義をお願いしたこともある。南音の技を高めるために、現在活動しているマレーシアのクラン同安会館とセキンチャン福建会館の南音団体を訪ね交流活動を行つた。仁愛音楽社はこのように試行錯誤しながら、次第に曲のレパートリーを増やし、南音のレベルを向上していく。話によると、現在仁愛音楽社の会員は 200 人ほど

いるが、実際活動に参加しているのは15人程度である。そのうち以前劇に歌い手として携わった女性が3人いた。毎年春と秋に2回南音の神様である孟昶の祭祀も、日々の活動に劣らず重要視された。シンガポールやマレーシアのほかの南音楽社との違いは、南音の学習や伝承において重要な役割がある楽譜である。他の楽社では伝統的な南音楽譜を用いるが、仁愛音楽社の楽譜は弾きやすくそして覚えやすくするため、民族楽器でよく使われる「簡譜」すなわち数字譜を用いている⁵⁰。

4-4-2 現在の担い手

1) 巴生雪隆同安会館南音組

巴生（クラン）雪隆同安会館南音組の前身は、1950年代に設立した巴生黃梨廠南樂部である。関係者の話によると、当時巴生黃梨廠南樂部とともに、橡胶公会、顏氏公会、廈門公会、金門公会など、いくつかの組織の中にも南音の活動があった。クラン地域の南音「弦友」たちは、固定の場ではなく、これらの組織を掛け持ちで活動をしていた。このような活動は断続でありながら、1970年代末まで続いている。1977年以降の国際南音大会の影響、とくに第3回の南音大会は1981年にマレーシアでの開催が決定されたことで、大会に参加するために、1980年に同安金廈会館の楊朝長など同郷有力者の支持を得て、張鴻墻や張木樹を中心にこれまで各団体で活動してきたメンバーが集まって巴生雪隆同安会館南音組を会館の編成とともに設立させた。張鴻墻は当時の音楽指導者であった。多くの若者を呼び寄せて、毎週週末に活動が行われていた。1981年の第3回ケアラレンプール東南アジア南音大会の際、同会館南音組からの参加者は総勢25名、マラッカ金廈同安会館に次ぎ多かった⁵¹。1983年、マレーシア福建聯合会文化部南樂組は第1回全マレーシア南樂歌唱大会を主催した。クランの同安会館の代表としてクラン・カパール出身の15歳の中学生林素梅が優勝した。巴生雪隆同安会館の関係者の話では、会館が設立後、南音組の指導者たちは、南音の技能を向上させるために、よく林素梅など若者を連れて、シンガポール湘靈社やマラッカの金廈同安会館などへ交流演奏を行ったという⁵²。当時のメンバーでは張鴻墻や張木樹の張一族の関係者が多かった。例えば、1981年東南アジア南音大会の参加者名簿には、張鴻墻の息子兄弟、従兄弟およびその配偶者の名前があった。彼らはのちに再設立した同安会館南音組の主要メンバーである。1989年以降、会館を取り囲む社会環境の変化、後継者やメンバーの不在により活動が中止となった。

⁵⁰許隆基氏と蔡長仁氏の教示、および現地での参与観察による（2023年3月）。

⁵¹『馬来西亞福建社團連合会 文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大会奏特刊（増刊）』（1981）による。

⁵²同会館南音組責任者張啓智（張鴻墻の息子）の教示による（2023年7月7日）。

一方、林素梅は、1989年に高校卒業後、台湾の大学へ進学した。台湾の南音楽社の活動に携わり、南音の爱好者からプロの南音演奏者、指導者まで成長した。台湾では、南音を普及するために、林素梅は作曲家卓聖翔と一緒に、南音の難解だという課題の解決にあたって、親しみやすい唐詩などを多く改編し、南音の学習を推進していた。2000年代前後、林素梅は台北市两岸南管音樂推進協會の初代理事長、鄉音出版社の編集長に就任した。彼女はその活動を大陸に広め、2006年には厦门で南音専門サイト「福建南音網」を開設した。林素梅は大陸の音楽家と協力し、大陸と台湾で「中華詩詞昆曲南管コンサート」を開催し、台湾南管（南音）と江蘇の昆曲を組み合わせた融合演奏形式を試みた。さらに、2006年以降、故郷マレーシアの南音楽社の指導者として、現在まで国内外の多くの南音活動に携わっていた。マレーシア、台湾と大陸を往来する南音の越境伝承者であろう⁵³。

1990年代ではクラン地域全体で、南音を演奏できるのは10人余りであった。1998年のある日、シンガポールの「弦友」張子波が親戚を訪ねるためにクランを訪れ、「真珠海鮮酒家」のオーナー陳友梓と知り合った。陳は閩南地域永春の出身者で、若い頃同じ地域の永春会館で南音の活動に参加したことがある。張が訪れたことで、再びクランに居住している南音「弦友」が「真珠海鮮酒家」に集まり、活動しはじめた。その活動に感銘を受けたマレーシア大学の陳漱石教授は2001年から、何度も新聞社や雑誌の記者に南音に関する特集記事を依頼した。それによってしばらく沈滯化していた南音は、再び社会各界の注目を集めた⁵⁴。



写真6：同安会館南音組（2023年7月21日クアラルンプール中国文化中心にて。左から張夫人の従姉妹、張夫人、息子の配偶者と息子、義理の娘の兄弟。資料提供：張啓智）

⁵³同会館南音組責任者張啓智の教示による（2023年7月7日）。

⁵⁴陳漱石の教示による（2023年7月8日）

2006 年の新年、瓜雪暨沙白県福建会館（セランゴール州サバッ・ブルナム県福建会館）はクランでアジア国際南音大会を開催し、林素梅を司会と演奏に招いた。大会の後、同安会館の南音組は、同会館の会長、総務、張啓智などの「弦友」とともに活動の再開をめざして準備し始めた。同時に、これらの動きを鑑み、瓜雪暨沙白県福建会館の陳觀福会長は、地元の有力者の支持の下で南音組を設立した（後述）。2008 年に、1980 年代において活動していた張啓智とその妻の一族などの「弦友」を中心に、「巴生雪隆同安会館南音組」を再設立した。張啓智は父親の影響で若い頃南音を学びはじめ、とくに洞簫に長けている。彼の妻やその従姉妹たちも会館のメンバーであった。張は 2008 年の時点では、会社の第一線から引退したため、南音組の責任者と指導者を任せられた。張は、南音を長く継承していくために、若い世代の育成の重要性を痛感し、若者に会館の参加を呼びかけ、自分の息子にも南音を教え始めた。2011 年、地元の地域で国際南音大会が開催されたとき、同会館から十数名の参加者が見られた。

「巴生雪隆同安会館南音組」は設立当時から人数が多くないが、技術性が比較的高い。前述のように南音には「指」「譜」「曲」があるが、「曲」のほうは比較的短く、演奏しやすくよく歌われるものである。同会館は「曲」だけではなく、「指」と「譜」一部も演奏できるメンバーが多い。若い世代にもそのように教え伝えている。これまで、台湾や大陸での南音交流活動にも参加してきた。現在、若いメンバーの大半は就職や結婚などの理由で会館を離れた。細くながら現在も活動しているのは張啓智の一族、すなわち、妻の従姉妹、末息子とその配偶者、配偶者の兄弟のような人たちである。現在定期的に活動するのは難しいが、何かイベントや海外交流活動があるとき、臨時に集まって会館で練習する。定期的に活動しなくとも、メンバーは技術性があるため、事前練習すれば活動に参加できるという⁵⁵。2023 年 7 月にクアラルンプール中国文化中心で開催したマレーシアの南音大会に参加した（写真 6）。

2) 瓜雪暨沙白県福建会館南音楽団（セランゴール州サバッ・ブルナム県福建会館南音楽団）⁵⁶

1970 年代にセランゴール州サバッ・ブルナム県のセキンチャンで設立された「雪蘭莪適耕莊雲宵音楽社」はその前身とされる。現地での話によると、セキンチャンは 1960 年代以降開墾された地域であ

⁵⁵ 張啓智の教示による（2023 年 7 月 7 日）。

⁵⁶ この項に関しては、鄭（2018）および現地調査（2023 年 7 月）による。

り、華人系人口の割合が高く、全人口の 70%を占める。セキンチャンが開墾されたばかりの頃、娯楽がほとんどなかった。その後、年間行事の必要に応じて、「永春花鼓隊」⁵⁷を結成し、冠婚葬祭で活躍していた。その後、福建会館はパハン地域から南音の先生を招聘し、花鼓隊の隊員を中心に南音を教えた。参加者の増加とともに、華人達は資金を集めて「雲霄南音社」を設立させ、仕事の合間に雲霄南音社に集まって南音を楽しんでいた。雲霄南音社の南音に惹かれ、30 人ほどの若い華人女性も、南音を勉強し始めた。雲霄南音社の活動は社内だけではなく、寺院での祭祀や冠婚葬祭の場、およびほかの南音楽社との交流活動も行った。たとえば、雲霄南音社で南音を覚えた女性の一人顔秀格（現在南音楽団の指導者の人）は、マラッカ同安金廈会館南音組の依頼を受けて、マラッカのラジオ番組での録音に参加したことがあるという。1980 年代にマレーシアの南音が衰退し始め、雲霄南音社も資金不足で維持できず、1989 年に解散した。

2006 年瓜雪暨沙白県福建会館当時の陳觀福会長の提案で、地元の南音爱好者を再編し、「南樂團」という南音音樂社が発足した。瓜雪暨沙白県福建会館南音団のことを、セキンチャン福建会館南音団と通称しているので、以下この名称を用いる。団長は福建会館の陳觀福会長が務め、副団長は福建会館の李秀菊元婦人組主席が務めた。指導教師はかつて雲霄南音社で習った経験がある顔秀格、顔玉宝、顔美華の 3 人である。そして、これまでマレーシア、中国大陸と台湾、および東南アジアの架け橋としての役割を果たしてきた林素梅を芸術顧問とした。設立の 2 年後、2008 年のインドネシア東方音楽基金会 25 周年記念大会や、2010 年の泉州国際南音大会にマレーシアの代表として参加した。このような一連の活動によって、マレーシアで長らく沈滞化になった南音は再び国際舞台に戻った。会館は団員の南音の技術を高め、若い世代を育成するために、2010 年より定期的に泉州から指導者を招聘している。2010 年に泉州出身の若手南音名手である李真綿を指導者として招いた。2011 年に、瓜雪暨沙白県福建会館の主催によって、セキンチャンで国際南音大会が開催された。中国の泉州とアモイをはじめ、シンガポールやインドネシア、フィリピンなどから代表団が参加した。地元のマレーシアからホストの瓜雪暨沙白県福建会館南樂團のほかに、巴生雪隆同安会館南音組と馬六甲同安金廈会館のメンバーも参加した。

現在、日常の「拍館」（社内で全員参与による演奏、練習、指導）活動は週に 3 回ほど行われている。団員は約 30 名、10 代から 70 代までの年齢構成である。20 代から 30 代までの団員は仕事でいそがしいか、地元から離れた場合もある。日常的活動には参加できないが、行事や演奏会があるとき、楽団に戻り、活動に参加する。この南樂團は福建会館に属しているので、会館は活動の場所や経費を提

⁵⁷ 「花鼓」とは民間太鼓踊りの一種である。

供している。活動のあと、必ず団員たちが集まって食事会を開いて交流する。2023年7月に林素梅は廈門の南音代表団を率いて、マレーシアの南音楽社との交流活動を行った。その際、クランとサバッ・ブルナムから現在活動している二つ南音楽社が参加した。2023年12月泉州で大会に参加するために、2023年10月より泉州から指導者蔡維鏞を招いた。2024年5月に国際大会を主催する予定となっている。現在マレーシアでもっとも活躍している団体である。

この南音楽社の特徴といえば、南音家族や先輩の紹介で入団したり、南音に興味を持って入団したりした青少年団員たちである。彼らはそれぞれ親や先輩の影響を受け、幼い頃から南音を学んだり、あるいは他の音楽を勉強したが、途中から南音に変えて学んだりしていた。たとえば、先述の楽団の指導者である福建省永春出身の顔秀格は影響力が強い。顔秀格と関係がある南音楽団員は彼女の5人の孫や孫娘だけではなく、他の2人の顔玉宝と顔美華とも複雑な関係がある。顔玉宝の息子は顔秀格の娘婿で、彼女たちは姻戚関係にある。顔美華と顔秀格は義姉妹の関係である（図表6）。南音の活動に参加することによって、世代（3世代）間を超えてコミュニケーションができる、南音は子供に伝統文化の教育にも役を果たしている。



写真7：セキンチャン福建会館南音楽団活動（2023年7月5日 前列左から筆者、顔玉宝、蔡煜勤、顔秀格）

直接に親戚関係を持つわけではないが、顔秀格が師匠となっている、原籍が同じ永春である第4世代の若者（黃鑑柔）は、その学習や実践の経験について次のように語っている：

「南音団が設立されたとき、まだ小学生ころだった。李団長は一生懸命に地域の人々に親戚や友だちの参加を呼びかけた。近所に住んでいるオバ（黃素琳）は私を会館まで連れて行った。初めに南音の楽譜を習ったわけではなく、私の師匠である顔秀格（先生）に数字譜で南音の歌を教えてもらった。最初の頃無理矢理に歌を習わせたが、習っているうちに徐々に好きになって、南音の学習や活動が楽しくなり、自ら会館へ行くようになった。2010年に福建会館は泉州から南音の先生（李真棉）を招聘

した。この時初めて、伝統的な南音楽譜と琵琶など楽器を習い始めた。歌うのはそれほど得意ではなかったが、黄オバはいつも丁寧に教えてくれた。このように、設立当時福建会館は南音の学習者を集めるために、まず近所の親戚や友たちの協力が必要であった。そのために、セキンチャン福建会館南音団はセキンチャン地域とのつながりが強く、のちに「汎家族」と言われるほどの伝承形態となっていた。黄（鎧柔）はみんなの前で歌う時とても緊張したが、上手い下手か関係せず体験（参与）するのは最も重要なことだと、先生やオバたちにいつも励ましてもらったという。

「私にとって、南音を通じて外へ（国内外）行けるようになり、多くの「弦友」と知り合い交流ができたこと、そして、上の世代の方々に愛され、世代を超えた共通の話題で話ができるることは、最大の収穫であった。とても感謝している。今から考えるとこのグループのメンバーの一人となったのは幸いのことであった」とあるように、交流（同じ世代、異なる世代間、社内外、国内外など）は南音の最大の目的であり、役割であることが明らかであろう。

黄（鎧柔）は高校卒業後、大学へ進学せずセキンチャンを離れ、ペットの美容の専門学校に通っていた。南音団が設立してからすでに16、7年間（2023年の時点）を経過した。そのうち勉強と仕事の関係で半分の7年間ほど外にいた。2022年よりやっと戻れて再び南音活動に参加できるようになった。自分が戻ってくる原動力となったのが、元団長、現団長および一緒に活動していた仲間の南音の伝承に対する熱意や努力だと、黄は語った。彼女は現在、セキンチャンでペットショップを経営している。今後、機会があれば、ペット美容や南音をより勉強するために中国へ行きたいと考えている。

黄と同年齢の仲間は林凱虹（琵琶、三弦）、林凱琪（二弦、琵琶、洞簫）、蔡煜勤（洞簫）の4人がいる。同じ2007年から南音の歌を習い、2010年に楽器を習い始めていた。会館の活動の際いつも同じグループで演奏していた。現在仕事の関係で離れ離れになっているが、南音による絆が強い。行事やイベントがある時、呼ばれたら必ず戻って参加する。彼女たちは、マレーシアではより多くの若者が南音に関心を持って、ともに南音を伝承していくことを期待している。

5. 考察

本稿の冒頭での設問、すなわち、人々の実践と行為、および生きるための工夫としての南音は海外華人社会でどのように伝承されてきたのか、南音によるつながりや関係性は人々の社会的参与、南音の継承にどんな役割を果たしてきたのかについて、行為、実践としての音楽、「社会関係や参与を促進する」という参与型音楽の視点から、検討してみたい。

5-1 地縁的組織による伝承と役割

これまで述べたように、マレーシア華人社会における南音の伝承は、主に閩南系華人の同郷会館のような地縁組織によって行われてきた。中国の人々の社会結合において、血縁集団と地縁集団はきわめて重要な意味をもっている。海外華人社会の研究では、人類学の関心は、宗族とその原理、つまり漢族（漢人）を中心とした家族・親族を支える父系出自原理によって形成された血縁的組織、および「血縁が空間に投影されたもの」（費 2019 : 164）としての地縁的組織に集中してきた。血縁や地縁は海外における華人社会関係や組織の基礎となっているからである。東南アジア華人社会では構成員の多くが、宗族の伝統が強い福建などの地域の出身者であり、集団移住によって移住先でも血縁的（同姓）地縁的集団を母体とする社会構造が確認できる。多くの同性、同郷会館が設立されたのもその社会構造の表れである。費孝通は中国社会の「序列的な構造配置」の論述の中で、個々が中心に他者との関係で生まれた様々な社会関係は、中国「伝統的な社会構造の中で最も基本的な概念」であり、「人と人との交流によって形成されるネットワークにおいて綱紀となっていたのは」序列为ると指摘している（費 2019 : 70-71）。ある意味では同じ構造を持つ地縁的組織（同郷会館）は交流によって関係づくりの重要な場であることが言える。同郷会館で設置された「南音組」や「南音団」といった組織は、参与型音楽の実践場と同郷会館の交流の場の二重の意味合いを持っている。これらの南音楽社は、前述のように、南音の先生を呼んで「開館」を通して学習したり、「拍館」「拝館」の活動を通じて横と縦と内外の関係を構築してきた。これまでマレーシアにおける閩南系華人にとって、日常の娯楽生活から非日常的な冠婚葬祭まで不可欠な社交場、交流親睦場、関係づくりの場としての役割を果たしてきた。世代の交代や時勢によって、会館にある南音楽社のほとんどは衰退していった。2000年代半ばに新たに設立し、現在まで活動が続いている南音団体（楽社）は従来通り同郷会館に所属している。

セキンチャン福建会館南音社について、①参与型南音の実践場として、「南音を習えば習うほど、無我夢中になり習慣になるし、みんなとの一体感を感じさせる」と黄が語ったように、トウリノが指摘した「一緒にパフォーマンスに参与するという行為を通じて」、「身体の動きや音を互いにシンクロさせることで」、「他者との一体感を経験」し、社会的な約束や仲間意識が感じさせるという役割（トウリノ 2015 : 19-20）と、②関係づくりと交流の場として、南音の行為者にとって「南音を通じて同世代の仲間との関係ができ、異なる世代間のコミュニケーション、国内外の『弦友』との交流ができる」と、それによって築いた関係は生業を営み、生きるための財産となっている」（黄の語りにより）と、まさに「音楽的活動への参与やその経験は、本来あるべき個人的・社会的な統合を実現するのにこの上なく重要な過程」であり、「社会的な存在である人間にとて不可欠な」ものだ（トウリノ

2015：17-20）、という役割を果たしていると考えられる。

5-2 生きるための工夫——参加型音楽から上演型音楽への変化

ここでは、マレーシアにおける南音伝承の特徴や性質をより明確するために、シンガポール南音楽社「湘靈音楽社」の事例を取り上げる。

シンガポールにおける南音楽社の誕生は19世紀末に遡り、横雲閣は最初の南音楽社とされる。横雲閣は日中戦争が勃発した際に中国の支援募金活動を行ったため、植民地政府に活動の中止を命じられた。のちに横雲閣の弦友たちを中心とした、雲盧南音社の設立もみられたが、積極的に義演を通じて募集活動が行われていたため、設立してからわずか3年でその活動が中止させられた。その後、横雲閣と雲盧南音社の筋を引いて、難民救済の名目で1941年に設立したのは、現在も活動している「湘靈音楽社」である。

戦後の1940年代後半から1960年代後半までの20年間は、シンガポールにおける南音の最盛期とされる。湘靈音楽社以外も、閩南出身者の会館や会所などなどの団体の復興により、張氏総会や安海公会、青年促進社、晋江会館泉聲音樂社、安溪会館の南音社のような、数多くの南音楽社が設立された。閩南出身者の日常生活から非日常の活動、さらに政府主催の文化イベント、テレビの出演など、様々な場でその活躍が見られていた。南音は華人としてのアイデンティティの保持に役割を果たしていた。しかし、1965年にシンガポールが独立してから、1960年代末から1970年代まで、南音は急速に衰退していった。湘靈音楽社の活動の復興のきっかけは、実業者である丁馬成が1977年に湘靈音楽社の名誉社長になったことである（王 2021b）。

丁は湘靈音楽社の復興のために、独自の工夫を南音に試みた。①南音の曲を短く再編するなど、時勢や状況に応じて多くの新曲を作った。②南音演奏の多様性を追求するために、南音に華樂^㊳の楽器を取り入れたり、演奏形式も劇音楽の演技的要素を入れたり、衣装や舞台装置も華やかにした。③資金を集め南音専用の会所の建物を購入したうえ、湘靈音楽社の組織改革も行った。④南音の継承や技術の向上のために南音と梨園劇の専門家を招聘した。⑤演劇を振興することを通じて南音を保存するという戦略を打ち出した。梨園劇を取り入れるために、音楽や劇に関心や才能がある若い女性を募集し（現在湘靈社の副社長である王碧玉もその一人）、彼女たちを若者の役者として育てていった。これらの改革は、より多くの人に南音を知ってもらい、伝統的南音を舞台で鑑賞できるような音楽に変換させる工夫とも言える。とくに、図表4のその1で示したように丁は南音の復興、発展に果たした

^㊳ シンガポールでは中国の民族音楽楽器による演奏された音楽を華樂と呼ばれる。

大きな貢献と言えば、国際交流を図るために世界的南音大会の創立と国際音楽祭賞の受賞である。

図表4 湘靈音楽社主な活動（1977年9月～2022年3月）（その1）南音の転換期

年代	活動	場所
1977年 9月	第1回「アジア南音大会」を開催	シンガポール
1979年 5月	フィリピンで開催される「第2回東南アジア南音大会」に参加	マニラ
1979年 6月	「マレーシア太平仁愛音楽社」落成式典に参加	マレーシア
1979年～1982年	シンガポール人民協会主催の新春パレードに参加	シンガポール
1980年 5月	湘靈音楽社の新社屋で宴会を開き東南アジアの弦友を招待	シンガポール
1980年 6月	文化部と観光局共催の地方戯曲会に参加	シンガポール芳林公園
1981年 2月	『南管精華大全』(上)を編集・出版	シンガポール
1981年 4月	『革新南曲』テープ4巻を出版	シンガポール
	文化部主催の華楽節演奏会に参加	シンガポール大会堂
1981年 7月	文化部と観光局共催の地方戯曲上演に参加	シンガポール芳林公園
1981年 8月	マレーシアで開催された「第3回東南アジア南音大会」に参加	クアラルンプール
1982年 3月	「フィリピン国風郎君社」の47周年記念式典に参加	マニラ
1982年 4月	文化部主催の華楽節演奏会に参加	シンガポール大会堂
1982年 5月	「香港福建体育会」に参加	香港
1982年 7月	文化部と観光局共催の地方劇行事に参加	シンガポール芳林公園
1982年 8月	『南管精華大全』(中)の編集・出版	シンガポール
1982年 9月	「梨園演劇俳優訓練班」を設立	シンガポール
1983年 4月	文化部主催の音楽祭に参加	シンガポール大会堂
1983年 5月	台湾で開催される「第4回東南アジア南音大会」に参加	台北、基隆、高総など
1983年 6月	「中国福建郷劇劇団」を招待	シンガポール首都大酒店
1983年 7月	「第37回国際音楽コンクール」に出場し、歌唱グループの第3位と楽器演奏の第4位を獲得	ノース・ウィルスランド
1983年 9月	「インドネシア東方音楽社」設立式典に参加	ジャカルタ
1983年 12月	梨園劇『陳三五娘』と『李亞仙』を公演	ヴィクトリア・シーターンシンガポール
1984年 3月	泉州文化局の招聘で、泉州、アモイなどで公演	中国福建
1984年 6月	シンガポール芸術祭で、湘靈人民協会華楽団と『梅花操』を共演	シンガポール大会堂
1984年 9月	マレーシア「バトゥー・パハト登義山道堂」の南音組設立式典に出席	マレーシア
1984年 11月	ラジオ録音『革新南曲』及び『陳三五娘』の『花見』	シンガポール放送局
	同安会館の新築落成式に参加し、劇と南音の新曲を披露	シンガポール
	「香港愛樂民樂団」のシンガポール出演に協賛	シンガポール大会堂
1985年 3月	「フィリピン国風郎君社」成立50周年の祝典に団体参加	マニラ
1985年 4月	「中国廈門歌仔戲劇団」の訪問を受け、記念品を贈呈	シンガポール
1985年 5月	「南曲イノベーションコンサート」を開催	ヴィクトリア・コンサートホール
1985年 6月	「甘榜菜市華樂団」の公演にて南音の新曲『建国銀禧』を披露	ヴィクトリア・ホール
1985年 7月	文化事務処及び観光局が主催する地方劇行事に参加	シンガポール人民協会劇場
1985年 8月	人民協会華楽、舞踊団と日本文化芸術祭に参加	東京、神戸、大阪、横浜
	文化事務処主催の演劇祭で梨園劇『十五貫』を演出	ヴィクトリア・シーターンシンガポール
1985年 9月	国立劇場華樂団の公演に参加し、南音の新曲を披露	ヴィクトリア・ホール
	「孟昶郎君」の生誕日の催事に劇と南音曲を披露	シンガポール湘靈音楽社の庭
1985年 10月	『南管精華大全』(下)編集・出版	シンガポール
1986年 1月	シンガポールを訪問した日本邦楽団、人民協会華樂団と共に演	シンガポール大会堂
1986年 2月	アモイで開催される「元宵南音大会」に参加。青陽、石獅と深滬の南音楽社と交流演奏	中国福建
1987年 9月	丁馬成社長が「シンガポール共和国文化賞」を受賞	シンガポール
1988年 3月	高雄、台南、台中、基隆、台北で巡回演出。丁馬成の南音創作曲と梨園劇の抜粋を披露	台湾
1989年 9月	高甲戯『審陳三』を公演	ヴィクトリア・シーターンシンガポール
1990年 11月	台湾漢唐樂府訪問及び共演	シンガポールチョンバル民衆連絡所
1992年 12月	『丁馬成逝去コンサート』を開催	シンガポールのラッフルズ・グローバー・シター

丁はシンガポール南音の復興を果たすために、閩南人が多くかつ南音楽社もあるマレーシアとフィリピン、インドネシアなど東南アジアの国との協力が必要であると考えた。そこで、丁は同郷の実業家に声をかけて援助資金を集め、湘靈音楽社は創立37周年を迎えた1977年9月にシンガポールで第1回アジア南音大会を開催した。マレーシア、フィリピン、インドネシアなどの国から南音楽社が参加

した。大会の際に南音の横のネットワークとして各国の南音団体による南音聯誼会が作られ、2年ごとに南音の国際大会を開くことが決定された。

この大会の意義は、南音大会という交流型大会が各国で定着し現在まで継承してきたこと、とくに南音の故郷である中国泉州地域に影響が及び、10年以上沈静化になった中国本土の南音が蘇って、その復興、創造、研究の道を歩みはじめ、世界無形文化遺産になるまで発展させたことにある。丁らが創作した「感懷」という作品は、1983年イギリスのノースウェールズで開催されたランゴレン国際音楽祭 (Liangollen International Musical Eisteddfod) フォークソング・コンテストで第3位を獲得し、同じ芸術祭で湘靈音楽社が演奏した南音の古典器楽曲『走馬』も器楽部門で第4位を受賞した。南音がはじめて国際舞台で入賞した実績になる。

図表4 (その2) 上演型音楽への発展期

年代	活動	場所
1993年 12月	大型梨園劇『駿迦仏』を上演し、収入を菩提小学校に寄付	シンガポール・ゴールデンシアター
1995年 6月	大型梨園劇『救母』を披露し収入の一部を観音救済会に寄付	シンガポール・ゴールデンシアター
1995年 12月	丁馬成の3周忌を記念して、泉州、南安とアモイを巡回演出し、南音新曲と梨園劇『救母』を披露	中国福建
1996年 6月	大型梨園劇『駿迦仏』の上演により駿迦の善女会賛助基金の募金に協力	シンガポールカリヨン劇場
1997年 1月	シンガポール戲曲学院と梨園劇『悲鶴記』を共演	シンガポール・ゴールデンシアター
1998年 6月	「シンガポール国際芸術祭」にて、特別招聘された中国泉州南音楽団、アモイ南楽団およびシンガポール華楽団と『漢唐古楽賦新声』(南音コンサート)を共演	シンガポール・ヴィクトリア・ホール
1998年 8月	モナコで国際芸術祭で新編梨園劇『山賊』を披露	モナコ
1999年 6月	創作梨園劇『弘一大師』を披露	シンガポール・ゴールデンシアター
1999年 9月	南安主催の「国際南音大会」に参加	中国福建
2000年 2月	泉州「第6回国際南音大会」に参加	中国福建
2000年 9月	「シンガポール国際南音大会」、「南音踩街(パレード)」、「南音コンサート」、「南音国際シンポジウム」を開催し、南音歌舞劇『華夏天声』を演出	シンガポール新達城、シンガポールカリヨン劇場
2001年 7月	義安中学校、聖公会中学校、聖ニグラ女子学校と学校間南音音乐会『ひなが鳴く』を共催	ヴィクトリア・ホール
2002年 1月～3月	聖ニグラ女子学校で南音の講義を実施	シンガポール
2002年 3月	「シンガポール国際華樂フェスティバル」にて劇と南音を披露	マレーシア雲頂娛樂城
2002年 9月	「マラッカ文化芸術祭」にて南音と梨園劇の抜粋を披露 『南音字韻』編集出版	マレーシア シンガポール
2002年 10月	「2002年度シンガポール文化授賞式」で南音を披露 濱海芸術センター移転式にて南音と梨園劇の抜粋を演奏	シンガポール大統領府 シンガポール・チャンギ空港
2002年 12月	泉州南音楽団と共同で丁馬成「作品歌唱・創作グランプリ」および『丁馬成逝去十周年記念コンサート』を開催	中国泉州
2003年 7月	国家芸術理事会協賛による『南音と梨園戲教科図書』(ビデオCD付き)を出版	シンガポール
	「廈門公会記念行事」にて南音の特別演奏会を開催	シンガポール如切民衆連絡所
2004年 7月	「国際音楽教育交流展」で『南音と梨園劇』を特別演奏	スペイン
2004年 8月	南安会館祝典で南音を披露	シンガポール
	恵安公会成立80周年の記念日に南音を披露	シンガポール
2005年 1月	泉州国際南音大会に参加	中国
2005年 3月	湘靈音楽社「清韻樂団」を設立	シンガポール
2005年 7月	南音コンサートでシンガポール華楽団と『南音迪韻』を共演	シンガポール・華樂団・コンサートホール
	廈門「海峡两岸南音芸術展」特別コンサート『画中樂』に参加	中国廈門思明映画館
2005年 9月	「南安国際南音大会」に参加 「世界日本留学生学会」との交流公演	中国泉州 シンガポール湘靈音楽社
2005年～2011年	中正本校で『南音と梨園劇』教育課程を実施	シンガポール

図表4（その3）専業的音楽団体への成長

年代	場所	活動
2006年 11月～12月	新聞社と芸術部が主催する「創意シティ2006」にて南音演奏(10回)	シンガポールのトミゴプラザ
2007年4月～6月	南音の専門家吳世安と王秀怡に南音を学びに社員をアモイに派遣	中国
2008年 7月	濱海芸術センターと南音作品『啓程』(旅立ち)を共同制作、演出	シンガポール濱海芸術センター小劇場
2009年 4月	インドネシア主催の「アジア・サミット」で南音特集『画中楽』を披露	ジャカルタ
2009年 9月	湘靈社芸術宴会その一『啓程』	シンガポール中華総商会ホール
2009年 12月	アモイ大学及び泉州師範芸術学院、泉州南音楽団との交流演奏 南音名師を訪ねるために、社員を泉州、石獅子、晉江に派遣	中国福建 中国福建
2010年 7月	2010年度「国際音楽コンクール」に出場しグループグランプリを受賞	ノース・ウィルスランド
2010年 9月	湘靈社芸術宴会その二『相和歌』	シンガポール中華総商会ホール
2010年 12月	南音の名士蔡維鏞に南音を学びに若い社員を泉州石獅に派遣	中国泉州
2011年～2012年	国国家芸術理事会の「団体補助金計画」の受益団体	シンガポール
2011年 7月	シェランマイ「国際南音大会」に参加	マレーシア適耕莊とクアラルンプール
2011年 9月	湘靈音楽社創立70周年及び湘靈社芸術宴会その三『偈者勇也』	シンガポール天福宮崇文閣
2011年12月、2012年3月	南音の名士蔡維鏞に南音を学びに社員を泉州石獅に派遣	中国泉州
2012年 7月	濱海芸術センターと南音音樂会『蟬息』を共催	シンガポール濱海芸術センター小劇場
2012年 9月	湘靈社芸術宴会その四『承』	シンガポールのチャンギ・ビーチクラブ
2012年 12月	台北の南音樂社での「拝館」:台湾音樂館にて創作南音のスペシャル公演	台湾
2013年 5月	韓国馬山「国際芸術祭」にて『啓程』を披露。馬山伝統歌謡と交流	韓国
2013年 6月	南音の名士蔡維鏞に南音を学びに社員を泉州石獅に派遣 「第1回海のシルクロード & 第10回国際南音大会」閉幕式で南音新曲 「秋」を披露。泉州培元中学校南音芸術団と『中新南音コンサート』を共演 ダナン主催の「世界無形文化遺産祭」に参加	中国泉州 中国泉州 ベトナム
2013年 9月	湘靈社芸術宴会その五『唐風宋韻』	シンガポール大巴窯戦備軍協、珍輝閣
2013年 10月	インドネシア東方音楽基金が主催の「国際南音大会」参加	ジャカルタ
2013年 11月	日本国際基金主催の「日本とアジア国交樹立40周年」「舞」に参加。参加 団体に日本歌舞伎、湘靈梨園劇舞踊など東南アジアの伝統歌舞	東京、ジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、シンガポール
2014年 7月	国家文物局主催の「シンガポール文化遺産祭」にて南音新曲を披露	シンガポール
2014年 1月	湘靈社芸術宴会その六『一闕繞梁』 「第1回シンガポール国際青年南音展演」を主催:南音劇『新荔鏡緣』を公演; 「伝統芸能伝承の現状と展望」シンポジウムを開催;『青音雅韻管弦 和』コンサートと『離合集散』芸術の饗宴を主催	シンガポールドラマセンター、芸術学院コン サートホール リゾート・ワールド・センター宴会場
2015年 5月	新仏國交樹立50年、フランスで『啓程』を巡回公演	パリ、シャロン、ナント
2015年 8月	濱海芸術センターと共同制作した南音劇(九歌・意象)を披露 「ペナン文化芸術祭」にて『南音の旅』を披露	シンガポール濱海芸術センター小劇場 マレーシア
2015年 10月	湘靈社芸術宴会その七『湘靈鼓瑟』	シンガポール大巴窯戦備軍協、珍輝閣
2015年 12月	南音の名士蔡維鏞に南音を学びに社員を泉州石獅に派遣	中国泉州
2016年 3月	インドネシア東方音楽基金訪問団と天福宮にて南音を共演	シンガポール
2016年 6月	シンガポールと日本国交樹立50周年の際、日本芸術文化の招きによ り東京と横浜で特別公演;大学で南音講座を開催	東京表参道カワイホール、横浜隆盛座、 大正大学、大東文化大学
2016年 9月	湘靈音楽社創立75周年及び「芸術宴会その八」『何日君再来』	シンガポール・キャピタル・シアター
2016年 10月～11月	泉州石獅南音の名士蔡維鏞を湘靈に招聘	シンガポール
2017年 4月	シンガポール「フランス文化祭2017」で創作南音を披露 ニューヨークの「アジア学会」の招きに応じて『啓程』を披露	シンガポール植物園野外ステージ ニューヨーク
2017年 10月	湘靈社芸術宴会その九『新不了情』	シンガポール
2017年 12月	「第3回海のシルクロード国際芸術祭」にて『九歌・意象』を披露	中国泉州
2018年 6月	濱海芸術センターと「第2回シンガポール国際青年南音大会」及び『啓程 10年』を共催、「清曲悠悠繞濱海」のライブ、『東方花園』芸術饗宴を主催	濱海芸術センター、グランド コブソーン ウォーター フロント ホテル
2019年 3月	台灣國光劇団と共同新作『費特儿』を共演	台北
2019年 5月	『華彩』文化芸術祭にて南音音樂劇『情鎖南洋』を演出	シンガポール・華族文化センター
2019年 8月	湘靈社芸術宴会その十『X.宴』	シンガポール・キャピタル・シアター
2018年 11月	「第4回海のシルクロード国際芸術祭」に参加。『古樂清音』南音特別公演	中国泉州南音伝承センター
2020年 6月	『海峡時報』と国立芸術評議会共催の「アート30日間」に参加し、湘靈社が 音楽ビデオ「秋」を制作	オンライン
2020年 8月	シンガポール55周年を記念する音楽ビデオ『東方花園X Home』を制作	オンライン
2021年 1月	湘靈社80周年記念行事アニメ『シンガポールにおける南音の発展』が公開	オンライン
2021年 2月	シンガポール「華芸節2021」にて越境コンサート『幻.南音.無界』を演出	シンガポール濱海芸術センター
2021年 4月～6月	ビデオ「クローズアップ」(全5話)を制作し、南音の楽器、歌と楽譜を紹介	オンライン
2021年 9月	国家文物局から「シンガポール無形文化遺産伝承者賞」を受賞	シンガポール
2021年 11月	濱海芸術センター主催の「KALAA UTSAVAM-INDIAN·FESTIVAL OF ARTS 2021」にて「CHOWK PRODUCTIONS」と『短い出会い』を共演	シンガポール海浜芸術センター
2022年 1月	アートビデオ「人生百態」(人生それぞれ)を公開	オンライン
2022年 3月	「シンガポール国際青少年南音大会」を主催	オンライン

アジア南音大会の主催と成功、および国際コンテスト入賞は、湘靈音楽社の国際的知名度と影響力を高め、南音界における国際的な地位を固めた。これは湘靈音楽社南音が参与型音楽から上演型音楽への変化の第1歩であった。

丁馬成の南音改革に関しては、湘靈社全ての人が賛成するわけではない。丁の死後、その継承者と指名された王碧玉（当時26歳の若い女性）は、丁から湘靈音楽社の社長を継承することに伴い、生存に関わる湘靈音楽社の内（改革反対派が湘靈社を離れ、新たに伝統南音社を設立するような人材流失）外（丁の死去により支援金の打ち切りなど）からのさまざまなプレッシャーや課題に直面し、相当の混乱と苦労を経験しながら、30年の歳月をかけて芸術団体としての湘靈音楽社を成長させてきた。

図表4（その4）定例活動

1948年～	年に3回、天福宮で南音または梨園劇を披露	シンガポール
1978年～	毎年旧暦9月に船でクス島の寺院に詣り、南音や梨園劇を披露	
2013年～	国家芸術理事会の「常年補助金計画」の受益団体	

出典：湘靈音楽社謝燕燕（2022）『行而不輟』330-338頁を参考し、筆者作成

図表4のその2とその3で示したように、湘靈社の活動はおもに二つの時期にわたることができる。「その2」で示した1993年からの時期では、王が湘靈社の生存のための工夫として行ったのは、伝統的な南音楽社で維持するようなことではなく、先代の改革を継承し芸術団体を目指すものであった。
①シンガポール華人には仏教信者が多いため、寄付金や観客を集めやすい、仏教の要素を取り入れた梨園劇『釈迦牟尼仏』の創作に力をいれた。『釈迦牟尼仏』は中国から梨園劇の専門家の指導の下で、シンガポール青年華楽団、国際仏教文化センター、敦煌舞踊団、光明山普覺禪寺青年団及び福海禪院合唱団の協力共演を得て、多くの寄付金を集め大成功を収めた。この成功を機に、仏教の説話に基づいた『目連救母』や春秋戦国時代の歴史を題材とした演目『悲鶴記』、『放山劫』などの上演も成功した。そのうちの『放山劫』は1998年のモナコ国際演劇祭にも参加した。これらの実績で1999年に湘靈音楽社による梨園劇『弘一大師』は、シンガポール・ゴールド・シアターでの上演を果たした。②南音の復興を果たした、中国との文化交流が盛んになった波にのって、福建から南音専門家とシンガポール華楽団の協力を得て、シンガポールの国際芸術祭で『漢唐古楽賦新声』というコンサートを上演し成功した。南音の再興に大きな転換期をもたらした。③湘靈音楽社の南音の実力と教育を充実させるために、芸術監督として中国泉州から専門家を呼び寄せた。④中国、インドネシア、フィリピン、香港、台湾、日本、と地元のシンガポールからのチームが参加した国際的南音大会、および南音研究に関する国際シンポジウムを開催した。この南音大会は国内外の熱烈な反響を呼んだ。中国・中央テレビ局は大会の全過程を報道する『南音伝南国』という特別番組として全国放送した。南音大会を通

して国内外に発信した湘靈音楽社の成果は、シンガポール国家芸術理事会の関心も引き起こした。国家芸術理事会は今後、湘靈音楽社が専業的音楽団体になるために国家の立場からサポートすると表明した。

2000 年代に入ると、これまで支援してきた財力者や組織団体のリーダーの世代交代などによって、寄付者が次第に減少していき、湘靈音楽社は遂に維持困難な財政状況に陥った。とくに 2004 年から 2006 年までの間に、所有建物の一部賃貸収入で湘靈社を維持することも余儀なくされた。湘靈音楽社は財政逼迫状況からの脱出や存続のために、「その 3」で示した活動を乗り出した。①多民族国家シンガポールにおけるエスニック文化芸術振興策の一環として、新聞社と芸術部が「創意シティ 2006」というプロジェクトを共催した。湘靈音楽社はシンガポール華人を代表する伝統芸能団体として参加する機会を得て、芸術センターで 3 年間公演契約を獲得した。湘靈音楽社はついに専業的芸術団体として国内外の公的な舞台に登場することになった。②芸術センターとの契約や提携を皮切りに、湘靈音楽社は華族文化センター、国家芸術理事会、台湾伝統芸術センターなどからの要請や協力のもと、『啓程』『蟬息』『九歌』『情鎖南洋』などのような現代舞台芸術として、新作舞台作品を生み出している。そのうち『啓程』は日本、フランス、アメリカなどの各都市で公演した。③若い人材を育成するため、南音の名士に南音を学びにメンバーを泉州へ派遣していた。現在の主要メンバーはともに泉州で学んだ経験がある。④湘靈音楽社は、一連の活動により 2013 年にシンガポール国家芸術理事会による「長年補助金計画」の受益団体となり、2021 年に国家文物局から「シンガポール無形文化遺産伝承者賞」を贈られた。一方、図表 4（その 4）で示したように、年 3 回開催の観音祭で、華人寺院である天福宮（媽祖を祀る）とクス島の福山宮で伝統的な定例活動も行っている。

このように、マレーシアの南音楽社と対照的に、湘靈音楽社は伝統的な参与型のような団体ではなく、専業的芸術団体として存続していくことを選択した、そのためにいかにして南音の参与型パフォーマンスが上演型に変化するか、を考えた工夫として一連の活動を実施してきた。湘靈音楽社という実践場での活動を通して、芸術団体としての役割を果たすことによって、メンバーの社会的参加が実現している。実践と行為としての南音を通じて、湘靈音楽社の横（社内のメンバー同士や他の芸術団体）のつながりと縦（芸術センター、芸術理事会、ファン）のつながりを構築している。すなわち、湘靈音楽社の集団としてのつながりは、参与型のように人々が実際に南音をすることで「互いの活動に注意を払いあって形成されるのではなく、パフォーマンスを提供するアーティストを通じて形成される」（トウリノ 2015：112-113）。これらの関係性は今後も湘靈音楽社の存続およびシンガポールの南音の継承に重要な役割を果たすと考えられる。

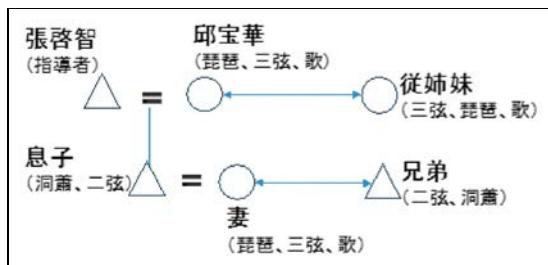
なお、シンガポールでは、南音の伝承組織として、湘靈音楽社以外、伝統南音社と堇菜芭城隍廟芸

術学院がある⁵⁹。

5-3 マレーシアとシンガポールにおける南音の伝承形態

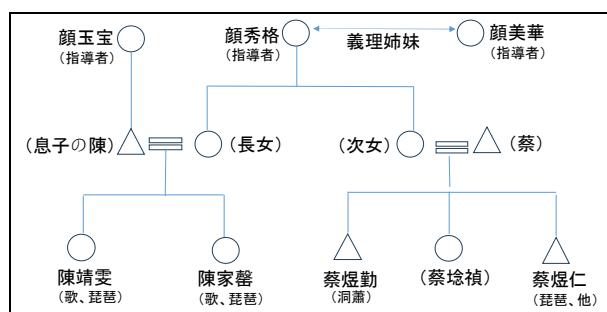
これまでの事例を通して明らかになったことは、マレーシアとシンガポールにおける南音の伝承形態の一つに、鄭（2018）が指摘した「汎家族」の傾向がみられる。図表5はマレーシア「巴生雪隆同安会館南音組」の伝承形態を示している。この図表から現在の同安会館南音組（南音楽社）の構成員は、家族と親戚によって構成されていることがわかる。

図表5：同安会館南音組の構成員（現地調査に基づき筆者作成）



同安会館南音組と同じ、セキンチャン福建会館南音団は、先述のように、設立当時福建会館は南音の学習者を集めるために、近所の親戚や友たちの協力が必要であった。それによって、南音団はセキンチャン地域とのつながりが強く、のちに「汎家族」のような伝承形態となった（図表6）。

図表6：セキンチャン福建会館南音団指導者顏秀格とその「家族」（鄭 2019、および現地調査に基づき筆者作成）



この現象はシンガポール湘靈音楽社にもみられる（図表7）。技能を身に着けるために泉州へ派遣

⁵⁹ 詳細について王（2021b）を参照

されたのも彼らであって、現在湘靈音楽社の柱となっている。

現在湘靈社の主要メンバー、すなわち正式社員の間に、王碧玉の一家族によって家族的関係が結ばれている。その状況になった背景には、図表4のその2で示したように、若者を呼び寄せるために、湘靈音楽社は2005年にシンガポール華樂団と湘靈音楽社の若者を中心に「清韻樂團」を設立した。当時20数名の大学生や高校生が集まって、南音の楽器だけではなく、華樂（民族音楽）の楽器を用いて南音曲を演奏していた。しかし、この樂團はわずか3年で解散となった。その理由は、①華樂の楽器や南音の楽器ができたとしても、南音という音楽を理解しない限り、南音の伝承に関して関心をもつことはできなかった。②前項①に関連するが、南音に関心を持っていなければ、大学への進学や卒業後の仕事の関係で湘靈音楽社から離れていくということであった^⑩。最終的に湘靈音楽社に残ったのは王の息子とその友だち（のちに王家族の一員になる）であった。

図表7：湘靈音楽社のミュージシャンおよび疑似的家族形態

名前	会社役名	関係	南音のプロ音楽家としての役割
王碧玉	副社長、総責任者		歌、琵琶など
林紹凌	芸術監督	泉州から招聘した最初のメンバー、湘靈社の擬似家族	歌、司会他
蕭銘賢	総経理	(王の次男)	琵琶、三弦
蕭銘峰	芸術管理	(王の長男)	洞簫
林明依	教育、外部連絡	銘賢の妻	歌、その他
李采遐	芸術経理	(銘峰の妻)	歌、その他
謝錦祥	行政経理	王の義理の息子	二弦

海外華人社会に共通することであるが、マレーシアとシンガポールの南音楽社のように、血縁関係、姻縁関係、地縁関係によって、いくつかの「家庭」が一つの大きな「一族」に結びついている事例がよく見られる。しかし、この一族の中では、すべてのメンバーが血縁関係や姻縁関係で結ばれているわけではないため、この一族を「汎一族」と呼ぶ。南音が衰退しつつあるマレーシアやシンガポールでは、家庭と同郷会館、あるいはその疑似的な組織が南音伝承において重要な位置を占めている。団員たちは南音の仲間意識や絆によって「汎一族」を形成した。そのため、「汎一族」は参与型であ

^⑩湘靈音楽社におけるインタビューによる（2023年6月28日）

れ上演型であれ、南音の復興や伝承に関して重要な役割を果たしていることが明らかである。

6. おわりに

本稿はマレーシア華人社会の事例を取り上げて、シンガポールの一部事例との比較を通して、海外における南音の伝承とその音楽（行為者として）の役割を見てきた。南音の伝承について、「ミュージッキング」と「参与型音楽」の基本となっている人と社会と自然の一元論的な現象と世界観という枠組みから、以下の点をまとめと課題としてあげる。

第一に海外における伝統文化の伝承についての要件である。

①伝承を支える方言集団・組織の役割。本稿の事例で示したように、南音のような地域性の高い音楽の伝承にはそれを維持できる方言集団（閩南出身者）と地縁的組織の支えが必要とされる。マレーシアとシンガポールには閩南出身者が多いにもかかわらず、世代交代によって閩南語、あるいは閩南の文化に関心を持つ人が減少し、これから南音の存続も大きく影響する。

②学校など教育の場の役割。学校は伝統文化教育に重要な役割を果たしている。本稿では詳細に説明していないが、シンガポールでは芭菜芭城隍廟（閩南系寺院）に属する芸術学院において南音課程を設置している以外、ほとんどこのような教育機関がない。マレーシアとシンガポールにおいて、最大のサブ・エスニック・グループの地縁的組織は、閩南出身者が多い「福建会館」である。両国における華人学校の多くはその傘下にあるにもかかわらず、マレーシアやシンガポール華人としての華語（中国語）教育が中心となり、方言（閩南語）や地域（閩南）文化の教育の場としての役割を果たしていない。

③「南音楽社」や「家元」のような伝承組織と伝承システム（制度）の役割。中国では南音の「南音楽社」のような伝承組織、日本では「家元」のような伝承システム（制度）は、伝統芸能や音楽の継承に大きな役割を果たしてきた。本稿で検討してきたように、南音楽社という組織が南音とともにマレーシアとシンガポールに伝えられ、これまで南音の継承に重要な役割を果たしてきた。本稿では言及していなかったが、日本（海外）における中国伝統楽器二胡の伝承と普及には、「家元」のようなシステムの役割が見られた（王 2014）。

④上位社会のサポートの役割。シンガポールの湘靈音楽社の事例でわかるように、今まで活動が続けられたのは、シンガポール政府のサポートがあったからである。湘靈音楽社は一連の改革の試みと実績を通して、芸術性の高い上演型音楽の組織へ変身したことで、その活動が持続できるような政府の永久補助金の受益団体となった。

これらの要件は南音に限らず、海外における民族（エスニック）文化の伝承に共通することである

う。

第二に、伝承形態について擬制的な「家族」組織が構成されていることである。本稿の事例で示したようにマレーシアとシンガポールとでは、南音の伝承形態が大きく変化していた。従来会館や同郷会に属する南音楽社のような社会組織的伝承形態から、次第に家族的、あるいは汎家族的形態に変わりつつある。この現象は南音だけではなく、多くの伝統芸能世界（例えば日本の筑前琵琶の世界で家元と違った家族的伝承形態）でも見られる共通的現象である（王 2021a）。

第三に、社会とのかかわりについて、言語・非言語双方による社会的融合のプロセスと役割である。マレーシアとシンガポールの事例で示したように、行為や実践としての南音は、①世代や階層、職業を超える言語・非言語的コミュニケーションができる、②音楽の参与を通して、自分がコミュニティの一員としての「われわれ」（華人、閩南人）の感情やアイデンティティの共有ができる、③伝統文化教育の役割を果たしていること、④民族（エスニック）文化の表出と創造（とくに湘靈音楽社の場合）ができる、などの役割を果たしている。

本研究は公益財団法人 JFE21 世紀財団 2022 年度「アジア歴史研究助成」による成果の一部です。同財団に心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 相田豊 (2022) 「孤独とつながり——ポスト関係論的音楽論に向けて 序」『文化人類学』
87-3 : 407-419
- 王耀華・劉春曙編 (1989) 『福建南音初探』福建人民出版社
- 王維 (2014) 『華僑的社会空間与文化符号』中山大学出版社（中国広州）
(2021a) 『日本筑前琵琶的音乐性及其传承体系』経済科学出版社（中国北京）
(2021b) 「華人の伝統文化の伝承——シンガポールの南音を事例として」『多文化社会研究』
7 : 1-36
- 王州 (2016) 「泉州南音海上絲綢之路交通中的国际传播様式研究」『音樂研究』4 : 40-52
- 黄秀琴 (2010) 『新嘉坡南音初探』シンガポール戯曲学院
- 黄志偉 (2018) 「論福建南音在馬来西亚的传承和發展」『音樂天地』4: 4-7
- 許振義 (2018) 『布衣南渡 中国民間文芸在新加坡的传播与変遷』南京大学出版社（中国南京）
- クリストファー・スマール (2011) 『ミュージッキング』(野澤豊一・西島千尋訳) 水声社

- グレゴリー・ベイトソン (2023) 『精神の生態学へ』(上) (佐藤良明訳) 岩波文庫
- 臧卓敏 (2020) 「海外伝統音楽の生存遷輯探蹟 以新加坡南音為対象的考察」『華僑研究國際學報』12-2 : 99-115
- 龔佳陽 (2010) 「試論泉州南音對南洋華僑華人的社会作用及其海外伝承」『大衆文芸』2:25-27
- 蔡悠榜 (1981) 「星馬南樂話滄桑」『馬來西亞福建社団連合会 文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大會奏特刊(増刊)』pp.146-148
- 謝琪燕 (2022) 『行時不輟』湘靈音楽社
- 莊国土 (2014) 「アジア東部の初期華人社団形成における主要な紐帶」(石村明子訳) 清水純・潘宏立・莊国土編『現代アジアにおける華僑・華人のネットワークの新展開』21-38 頁
- 陳敏江 (2018) 「“物”化的南音——印尼東方音楽基金会“南音人”口述史研究」『音楽研究』1 : 85-93
- 陳燕婷 (2018) 『古樂南音』文化藝術出版社
(2020) 「回帰伝統的湘靈音楽社」『音楽生活』4 : 47-51
- 陳孝余・王瓊 (2020) 「福建南音館閣現状調査報告 上」『福建芸術』2 : 18-25
(2020) 「福建南音館閣現状調査報告 下」『福建芸術』3 : 18-25
- 鄭長鈴 (2017) 「两岸南音文化伝承伝播中的『再創造』比較研究」西安音楽学院学報(季刊)
36-1 : 11-27
(2019) 「中華文化海外“泛家族”式伝承伝播初探 以馬來西亞適耕莊福建会館南音復興為例」
西安音楽学院学報(季刊) 38-4 : 42-46
- 鄭全 (2014) 「1980年代以降のマレーシア華人社団の新たな発展」(玉置充子訳) 清水純・潘宏立・莊国土編『現代アジアにおける華僑・華人のネットワークの新展開』457-490 頁
- トマス・トウリノ (2015) 『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ 歌い踊ることをめぐる政治』
(野澤豊一・西島千尋訳) 水声社
- 野澤豊一・川瀬慈編著 (2021) 『音楽の未明からの思考 ミュージックキングを超えて』ARYES
- 費孝通 (2019) 『郷土中国』(西澤治彦訳) 風響社
- ピエール・グルーデュー (2007) 『実践理性 行動の理論について』(加藤晴久他訳) 藤原書店
- 松家裕子 (2001) 「樂府の『艶歌行』古辞を読む」追手門学院大学文学部アジア文化学科『アジア文化年報』4: 76-96
- 毛利嘉孝編著 (2017) 『アフターミュージックキング 実践する音楽』東京藝術大学出版会
- 羅天全 (2007) 「南音在海外的伝播和發展」『音楽研究』2 : 29-35

山本博之（2017）「マレーシアの華僑華人」『華僑華人の事典』丸善出版、298-299頁

参考資料

新加坡晋江会館（1978）『新加坡晋江会館記念特刊』

馬来西亚福建社団連合会（1981）『文化部南樂組成立記念暨東南亞南樂大会奏特刊（増刊）』

（1983）『文化部南樂組主辨 第1回全国南樂歌唱比賽記念刊』

『特刊 瓜雪暨沙白県福建会館南音樂団成立5周年及馬来西亚国際南音滙演』（2011）